＜令和４年度＞

鳥取県文化芸術事業

評 価 報 告 書

《本編》

鳥取県文化芸術事業評価委員会

～　目　　次　～

１　総合評価・・１

２　実施結果概要
（１）実施事業一覧・・・３
（２）評価の体系・・３

３　事業別評価
（１）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 メイン事業（とりアートオペラ公演実行委員会）　４
（２）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 東部地区事業（東部地区企画運営委員会）・・９
（３）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 中部地区事業（中部地区企画運営委員会）１２
（４）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 西部地区事業（西部地区企画運営委員会）１８
（５）第 13 回とっとり伝統芸能まつり（鳥取県地域づくり推進部文化政策課）・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
（６）第 66 回鳥取県美術展覧会（鳥取県地域づくり推進部文化政策課）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
（７）第４回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会（鳥取県地域づくり推進部文化政策課）・・３３
（８）第 35 回県民による第九米子公演（県民による第九公演実行委員会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７

４　専門家評価・・・４３

（参考）
・鳥取県文化芸術事業評価委員会　委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５
・鳥取県文化芸術事業評価委員会　事業別評価報告書執筆担当一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６
・鳥取県文化芸術事業評価委員会　評価委員会の開催状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４７
・鳥取県文化芸術事業評価委員会設置要綱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８

（別冊）令和４年度　鳥取県文化芸術事業　評価報告書《資料編》

1　総合評価

【本年度の評価方法】

・評価方法について、事業実施者の策定した取組目標や行動計画に基づき、それらの達成度を評価する構成は基本的に昨年度（従来）と同様であり、評価の段階は「達成」、「概ね達成」、「一部達成」、「未達成」の４段階とし、それぞれ３点、２点、１点、０点と数値化し、達成度を確定した。また、各事業の総括を行い、「成果」、「課題」、「その他事業に関する意見、感想」に事業の全体評価を評価委員の視点で記載している。

・一方、取組目標及び行動計画の設定並び達成度評価の視点として、県が策定している「アートピアとっとり行動指針」に掲げる施策の方向性との関連がより明確となるよう、事業評価シートの作成にあたり留意すべき事項を事業実施者と評価委員で共有し、本年度の事業評価を実施した。具体的には、「取組目標」の設定にあたっては、同指針の内容を十分に踏まえるとともに、「行動計画」には、「掲げる取組目標を達成するための具体の取組事項」、「そのために工夫した事項」、「前年度からの見直し事項」等を具体的に記載し作成するものとした。

【本年度の事業評価】

・昨年度に引き続きコロナ禍の中での事業実施となった。開催時点の感染状況により、一部事業の細部に変更があったものの、全ての事業において感染防止対策を適切に講じつつリアル開催することにより、アートに親しむ環境づくりに一定の成果をあげることができたことは評価に値する。関係者の皆様のご尽力に心から敬意を表する。

・そのような中、多くの事業で課題となったのは、若者層をはじめとする新しい観客層の取り込みという点である。広報面では、従来のポスター・チラシをはじめとする SP 媒体やマス媒体に加えて近年は HP や SNS などのインターネット媒体が活用されてきているが、若者層等への関心を一層広げるためにも、文字情報だけでなく短時間の映像を用いるなどコンテンツ面での一層の工夫が必要である。また、SNS 等の活用においては、予算面でのあい路もあるかもしれないが運用にプロの手を借りるなど運用面での一層の工夫を検討することが必要である。また、ここ数年はコロナ禍で困難であった「食」とのコラボ企画など、普段文化イベントに関心の薄い層への関心をより広げる工夫も期待したい。

・それぞれの事業で評価させていただいている中で、ある事業で課題となっている事項を他の事業ではうまく工夫して展開し、成果としている例もある。事業者間で情報交換し合い、他の事業の良い点を参考に取り入れるのなどの取組も期待したい。

（１）とりアート事業（「とりアート 2022 メイン事業」、「とりアート 2022 東部、中部、西部地区事業」（4 事業）

・とりアート 2022 メイン事業は、コロナ禍の中で１年延期となったが、海外で活躍する本県出身のプロのオペラ歌手を主役に迎えるとともに一部公募出演者を含む地元芸術団体と協働しながら、原曲原語で上演されるなど総合芸術であるオペラの醍醐味を存分に伝えることができ、大変意義深い取組となった。こうした公演が将来に向けて持続可能なものとなるよう、後継者の発掘、育成に向けた取組の展開を期待したい。

・東部地区は、２０周年という節目を迎える中で、関係者の意気込みが大いに感じられるものとなった。特にオペラ・ミュージカルのライブ感のあるステージが高評価であった。また、FM 鳥取とのコラボによる会場からの公開生放送を通じて、会場にいない人にもとりアートの雰囲気を感じてもらうという新しい挑戦も評価できる。若者層の取り込みを工夫していく必要がある。

・中部地区は、昨年度以上に多彩な企画が展開され、観客満足度の高いものとなった。中部地区がテーマとして掲げる次世代育成の取組も着実に成果をあげている。若者層の集客に一層の工夫が求められる。

・西部地区は、米子市児童文化センターという普段から親子で足を運ぶ機会の多い場所という特性を生かし、親子連れをはじめ様々な年齢層の県民にアート体験が気軽にできる機会を提供した。会場の制約や開催コンセプトの違いもあろうかとは思うが、入場者が他の 2 地区と比べても西部地区全体の取組としては物足りない。間接的な体験とはなるが、例えば録画映像の YouTube 配信など、より多くの県民が気軽にアートにふれることができる機会提供となるような工夫を期待したい。

（２）鳥取県文化政策課主催事業（「第13回とっとり伝統芸能まつり」、「第66回鳥取県美術展覧会」、「第4回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会」）（3事業）

・とっとり伝統芸能まつりは、伝統芸能を継承する出演者の活動披露の機会として、また、地域の伝統芸能を見てその良さを体感する機会としても大変意義深い取組となった。コロナ禍の中での開催ということもあり、来場者は目標を大きく下回ったが、録画映像の YouTube 配信という新たな試みを通じて、鳥取県各地の伝統芸能をより多くの方々に知ってもらうことができたことは評価できる。

・鳥取県美術展覧会は、臨時的ではあるが境港会場での選抜展を実施することで、初めて鑑賞に訪れる人も多数あるなど地域の文化・芸術に対する興味・関心を呼び起こすことに繋げることができた。コロナ禍の中で、ギャラリートークの開催が中止されたことを残念に感じる来場者が多く、改めてギャラリートークの意義を感じさせられた。

・万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会は、第 1 回大会以来 3 年ぶりに県外高校生を含めたライブ開催となり、エキスカーションを通じて県内外の高校生に鳥取を知ってもらう良い機会となるとともに、大会が全国ニュースで取り上げられるなど情報発信にもつながった。県内参加者が一部高校にとどまっており、今後は県内高校生の参加を促す取組みが求められる。

（３）鳥取県文化団体連合会加盟団体主催事業（第35回県民による第九米子公演）

・コロナ禍の中であったが、目標を大きく上回る多くの入場者数とともに、非常に観客満足度の高い公演となり、大成功といえる。コロナ禍のゆえではあったが、合唱団のメンバー数を減らし、マスクを着用しての合唱だったために、オーケストラとのバランスが十分とれていなかったという声が少なからずあったのが残念であった。取組が今後も持続可能なものとなるよう、出演者やスタッフの確保策の検討も求められる。

【今後の評価に向けて】

・引き続き取組目標及び行動計画の設定並び達成度評価の視点として、県が策定している「アートピアとっとり行動指針」に掲げる施策の方向性との関連がより明確となるよう、事業評価シートの作成にあたり留意すべき事項を事業実施者と評価委員で共有し、事業評価を実施していく。

・アンケート調査が今後の事業の改善に向けてより活用しやすくなるように、調査の項目を点検・改善していく必要がある。

令和５年３月
鳥取県文化芸術事業評価委員会
会　長　　山　本　仁　志

2　事業実施概要

（1）実施事業一覧

番号	主体	団体名	事業名	実施日	実績				
					入場者数	アンケート配布数	アンケート回収数	アンケート回収率	満足度
1	とっとりけん総合芸術文化祭実行委員会	とりアートオペラ公演実行委員会	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022メイン事業	令和4年8月28日(日)	888人	888枚	322枚	36.3%	93.2%
2		東部地区企画運営委員会	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022東部地区事業	令和4年11月26日(土)～27日(日)	1,364人	749枚	322枚	43.0%	91.0%
3		中部地区企画運営委員会	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022中部地区事業	令和4年11月19日(土)～20日(日)	2,648人	643枚	416枚	64.7%	93.5%
4		西部地区企画運営委員会	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022西部地区事業	令和4年11月12日(土)～13日(日)	460人	310枚	190枚	61.3%	96.8%
5	鳥取県	地域づくり推進部文化政策課	第13回とっとり伝統芸能まつり	令和4年12月４日(日)	270人	270枚	188枚	69.6%	87.8%
6			第66回鳥取県美術展覧会	令和4年9月17日(土)～12月7日(水)	9,465人	9,465枚	5,105枚	53.9%	81.1%
7			第４回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会	令和4年11月13日(日)	45人	45枚	17枚	44.3%	92.8%
8	鳥取県文化団体連合会	県民による第九公演実行委員会	第35回県民による第九米子公演	令和4年11月27日(日)	954人	954枚	444枚	46.2%	99.5%

（2）評価の体系

内部評価	①事業の自己評価（事業評価シート） ※とりアートについては公募事業参加者へのアンケートを実施 ※評価シートは事業別に作成
外部評価	②観客アンケート ③評価委員会委員による実地検証（事業評価シート） ④専門家による評価（とりアートメイン事業）

→ ④事業別評価 → ⑤総合評価

3　事業別評価

（1）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 メイン事業

令和４年８月 28 日（日）とりぎん文化会館

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	県民誰もが気軽に文化芸術に触れる機会の提供	感染症対策を万全に行い、来場者、出演者、スタッフが安全で安心して参加できるイベントとする。 ・県規定マニュアルの徹底、順守 ・検温、手指消毒 ・連絡先の把握 ・出演者、スタッフの抗原検査 ・感染対策に関する場内アナウンス ・休憩時にドアを開放し換気など	**達成度：達成** 【成果】 健康観察表・検温・マスク・換気・PCR 及び抗原検査等を練習時から徹底して行い、長い練習期間においてもクラスターを発生させることなく本番を迎えることが出来た。 公演終了後もガイドラインに沿って観客を安全に誘導し退館させることが出来た。	**達成度：達成** 【成果】 県規定マニュアルは徹底され、出演者、スタッフへの PCR・抗原検査の実施をはじめ練習時から感染症対策を万全に行い、クラスターを発生させることなく本番につなげることが出来た。 一方、来場者へもガイドラインに沿って適切に対応するなど来場者、出演者、スタッフが安全で安心して参加できるイベントとすることで県民誰もが気軽に文化芸術に触れる機会の提供ができた。
		本公演前年度から他のとりアート事業と連携した関連企画を実施するなど、広く一般の方々を対象に幅広くオペラの魅力に触れる機会を提供するとともに本公演に向けた機運醸成に取り組む。 ・東部地区（R3 年度）…ワークショップの実施 ・中部地区（R3 年度）…公開レッスンの実施	**達成度：一部達成** 【成果】 コロナ禍であった為、歌唱を伴う周知活動はできなかったが、『オペラを作ろう～小道具編～』というワークショップでは子どもたちに小道具を作ってもらい、制作面からの新しい参加機会を作ることが出来た。 また、練習風景や主役の谷口氏、指揮の大勝氏、演出の中村氏に登場いただき、公演に向けたメッセージを動画で発信するとともに知事表敬や新聞記事掲載、日本海新聞・朝日新聞読者へのチケットプレゼント企画を実施するなどさまざまな方法で事業をＰＲすることができた。 今後も会場周辺の施設の協力を仰ぎ色々な世代の人々に興味・参加を持ってもらえる方法を考えたい。	**達成度：　一部達成** 【成果】 本公演前年度から東部地区、中部地区において他のとりアート事業と連携し、ワークショップや公開レッスンを開催し、広く一般の方々を対象にしたオペラの魅力に触れる機会を提供した。 特に子供たち向けの「オペラを作ろう～小道具編～」というワークショップでは制作面からの新しい参加機会を作るというユニークな取り組みとなった。
			【課題】 地域を巻き込んで活動を広めるためにはとりアート地区委員会との連携が不可欠。 東部及び中部では関連事業を実施できたが、さらに広がりを持たせる必要がある。	【課題】 東部と中部では関連事業を実施できたが、西部地区では行われず、大方の来場者が東部在住者であった。 開催地以外の地域への PR の充実を含め、さらに広がりを持たせた新たな取り組みが必要である。

			※関連事業 ・『オペラを作ろう～小道具編～』（東部／参加者 10名）…実際に公演本番で使用する小道具を制作するワークショップ ・『のぞいてみよう！コレペティトゥアのお仕事～オペラ「ドン・ジョヴァンニ編』（中部／参加者 17 名）…普段なかなか目にすることのないレッスンの様子を公開 （R３年度、各地区で周知コンサートを予定していたが、新型コロナの影響により全てキャンセル）	
「アート」が育む・「アート」を育む ～人づくり～	支援者・担い手・後継者の育成、育成した人材を活用する場の提供	出演者（ソリスト、合唱）やスタッフ（舞台照明アシスタント）を公募することにより、県内の人材発掘及び育成に努める。	**達成度：概ね達成**	**達成度： 概ね達成**
			【成果】 鳥取県内の男性ソリストを育成するためオーディションを実施し、騎士長役を起用。騎士長役を務めたソリストはイタリア語も演技も初心者であったが本番では見事に歌い上げるまでに成長した。 また、スタッフとして演出助手１名及び照明スタッフ１名の応募があり、それぞれが専門家（プロ）の間近で、さらにその指導を受けながら様々な経験をし、信頼できる人材として公演を支えてくれる存在に成長した。 本公演のために特別に編成した「とりアートオペラ合唱団」も大舞台でプロの歌手と一緒に歌うことに喜びと達成感を感じていた。	【成果】 男性ソリストのオーディションを実施し、新しい人材を発掘し、本番で見事に演じきるまでに成長したことは、大きな成果と思われる。 また、公募したスタッフ２名の新人が、専門家から指導を受け、経験を積むことで、後継者の育成、新たな人材を活用する場の提供につなげることができた。 地元の人材発掘に大きな効果があった好機となった。
			【課題】 今後、「大きな公演に向けて」だけではなく、日常的にどのような内容でレベルの底上げを図り、若手演奏家を育てていくかが課題。	【課題】 今回育成した、ソリストやスタッフを今後どのように育成してさらなる後継者を発掘していくか、今後の日常的な取り組みの展開を期待する。
		県内から公募した出演者やスタッフが参加し、国内外で活動されるトップアーティストと一緒になって創り上げることを通じ、舞台技術や創作、演出の新たな視点や感性に触れ、地元活動者のレベルアップに繋げる。	**達成度：達成**	**達成度： 達成**
			【成果】 プロのオペラ歌手と共演し、鳥取の出演者が受けた影響は想像以上に大きなものであった。 一言一言が出演それぞれの心に響き本番前の一か月間で演奏者のレベルと集中力が格段に上がった。県外からの観客も呼び込むことが出来た。	【成果】 本県出身のプロオペラ歌手谷口氏をはじめ国内外で活躍するプロのソリストや指揮者、演出家などのトップアーティストとの練習、共演を通じて舞台技術や創作、演出の新たな視点や感性に触れることで、地元活動者のモチベーションアップと活動のレベルアップが図られ、観客にとっても大満足の公演となった。

「アート」で元気に～地域づくり～	地域住民の参加を促し、アートをつくりながら地域活性化	様々な地元文化芸術団体（ピアノ、オーケストラ、合唱など）と協働することで、アートを通じた地域活性化を図る。	達成度：達成 【成果】 モダンダンスのダンサーが出演し、臨場感溢れる雰囲気を作り出すことが出来た。 ピアニストには練習はもちろん、本番では字幕のキュー出しなど裏方として携わった。 コロナ禍で人との繋がりに薄れていた合唱の方々にはオペラを通して人の温もりを感じることのできた大切な時間だったと練習期間を通してその表情から感じることが出来た。 またオーケストラにおいては絶大な賞賛の声を多くいただいた。 コンサートマスターによるマンドリン演奏も大いに観客を楽しませた。	達成度：達成 【成果】 コロナ禍で集まることが難しい中にもかかわらず、総合芸術のオペラを様々な地元芸術団体と協働することができ、地域芸術の活性化につながった。 また、本番では特別に編成した合唱団のみならずオーケストラが素晴らしい演奏を行い、観客を大いに楽しませた。
達成度集計(※５)			（１２／１４）≒８６％	（１２／１５）＝８０％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績※
アンケート回収率（%）	２０％	３６．３％	５０ ％
観客満足度（%）(※6)	９０％	９３％	９５．９ ％
入場者数（名）(※7)	９７１人	８８８人	５２２ 人

※昨年度実績：前回のメイン事業「鳥取銀河鉄道祭」（Ｒ１年度)の実績

【自己評価総括】

○成果

この度「ドン・ジョヴァンニ」原語上演という難題に取り組んだが、２０年というとりアートの歴史の中で「ポラーノの広場」「魔笛」「ヘンゼルとグレーテル」を経て鳥取の演奏家のレベルが向上したこと、さらにプロのオペラ歌手による観客を引き込む見事な歌唱力と演技力が今回の「ドン・ジョヴァンニ」公演の成功として実を結んだ。

この度の成果としては大きく３つ挙げられる。

①海外で活躍する鳥取市出身のプロのオペラ歌手谷口氏を主役のドン・ジョヴァンニ役に迎えることで初めてオペラを見る観客にも総合芸術であるオペラの醍醐味と作品の面白さを伝えることが出来、県内外からの観客にとりアート事業の取り組みをアピールすると共にオペラファンが確実に増えた。

・谷口氏にはそれ以外にもハードな練習の合間を縫って知事表敬やマスコミへの周知活動にも積極的に対応いただき集客に大きく繋がった。また、自主練習も提案して頂き鳥取の出演者に分かりやすく指導を行っていただき貴重な学びとなった。

②新しい運営メンバーにより、オペラ公演におけるノウハウを学びながら運営を行った。

・コロナ禍となり右往左往したが、本番もスタッフが少ない中、事故もなく公演を無事に終えることが出来たことは良かった。

・プレコンサートに加えコロナ禍でとりアートをアピールできる方法を模索し、PR 動画制作等の新しい試みに取り組めたことは良い経験となった。

・感染対策においては常に緊張感を持って徹底したためクラスターを発生することもなく安全に練習に取り組むことが出来た。

③騎士長にオペラ初参加の男性ソリストを起用。

・鳥取県内の男性ソリストを育成するためオーディションを経て起用。オペラ公演までに幾つかのコンサートに出演し、経験を重ねてもらった。演出家、指揮者の指導により本番ではクライマックスにおいて重要な役柄である騎士長を見事に演じた。鳥取県内では男性歌手はほとんどいないのが現状だが、今後も人材発掘には力を入れていきたい。

今回の公演では鳥取の音楽文化のためを想い、身を挺して大切なことを伝えようとしてくれる谷口氏の姿にみんなの気持ちが一つになって昇っていく感覚を感じることが出来た公演だった。それは会場にいた聴衆にも十分に伝わったとアンケートを見ても感じる。人に感動を与える本物のオペラ公演を鳥取県民主体のメンバーで出来たことは、文

化立県を掲げる鳥取県が地元文化の育成のため、他県に類を見ないとりアートという文化事業を長年継続させてきたことと、鳥取でオペラの礎を築き発展させて下さった方々の功績である。複数の分野の芸術の混交により創造される総合芸術であるオペラの発展はとりアート事業なしではあり得ない。今後も地元で頑張る団体や個人のプレイヤーを鳥取の芸術文化の発展のため上手く使いながら活動を支援し、育った人材がふるさと鳥取に戻り活動しやすい環境を作ることが「住みやすい街・鳥取」として注目される魅力の一つになると思う。

〇課題

・企画から公演までの一連の運営を通し、とりアートの意義について改めて深く考えさせられる機会になった。これを出演者の皆にも共感してもらえるよう丁寧に説明することが大切だと感じた。

・公演会場周辺の学校の学生たちにも公演の案内をしたく出向いたが、教育委員会の決まりやコロナの影響もあり実行できなかったので（新聞社読者プレゼントとして学生券のプレゼントを実施）、若い世代の集客につながるチケット販売方法の改善や交流の機会がさらに必要だと思った。

・コロナで歌唱を伴う周知活動はできなかったが、「オペラを作ろう～小道具編～」というワークショップでは子どもたちに制作面からオペラに参加してもらう新しい試みが出来た。色んな世代の方々にも参加してもらえるような取り組みを模索し続けることが必要だと感じた。

・いつも思うのは長い期間準備して一回の公演で終わってしまうことが勿体ないこと（前回の「ヘンゼルとグレーテル」は規模をかなり小さくして学校公演をしている）。今回の公演は再演を望む声が多いので鳥取県中・西部でも公演ができる日が来ればと思う。

・鳥取県クラッシックアーティストオーディションも無くなり音楽家を目指す県内の若者を知る機会が困難になったと感じるが、情報を集めながら新しい人材を発掘し、研修や出演できる演奏会などの取り組みを今後も行っていきたい。

・レベルアップに繋がったかどうかというのは第三者的な目線による判断も必要だと思う。公演の評価だけでなく三年という長い年月をかけてどれだけの成長を遂げたかということにも関心を持っていただければありがたい。

〇その他事業に関する意見、感想など

・とりアートのホームページを閲覧しても、文化芸術に対するワクワクやドキドキが伝わってこない。ホームページを見て、公演・イベントに「行きたい！」と思わせる工夫が必要と感じる。

・とりアート実行委員・事務局の練習視察等がなかった。コロナ禍で難しい面もあるが、とりアートとして事業を盛り上げていくためには、公演本番のみならず、それ以外の部分でも関わっていくことが重要であると考える。

【委員評価総括】

〇成果

● 県民・地域活動者への文化貢献

・海外で活躍する鳥取市出身のプロのオペラ歌手谷口氏を主役に迎えることで初めてオペラを鑑賞する観客にも総合芸術であるオペラの醍醐味と作品の面白さを伝えることができた。

・様々な地元芸術団体と協働するなど、オペラを通じて複数の分野の芸術が長期間にわたり１つの作品作りに参画することで地域芸術の活性化につながった。

・20 年というとりアートの歴史の中での、総合芸術のオペラをメイン事業とした取り組みは、生の演奏のフルサイズのオペラを聴く機会のない県民にとって、大変意義深い好機となった。

● 人材育成

・出演者やスタッフを公募した結果、それぞれ応募があり、オペラ公演までにプロの指導を受けつつ様々な経験を重ね本番を支える人材に成長するなど、人材発掘及び育成に努め、担い手、後継者の育成、育成した人材を活用する場の提供につなげることができた。

● 周知・広報・コロナ対策

・地元団体との協働ということで、そこから知人の方への口コミの効果は大きい。

・コロナ禍により１年間延期になったにもかかわらず、練習時から感染症対策を万全に行い、クラスターを発生させることなく本番につなげるとともに、来場者、出演者、スタッフが安全で安心して参加できるイベントとなった。

・定量目標としていたアンケート回収率、観客満足度については目標を達成することができた。

〇課題

● 周知改善・集客層の拡大

・観客は中高年、女性が過半数を占めていた。これからの舞台芸術の担い手でもあり、観客として若年層への広がりを持たせることが課題と感じる。

・学校などへ出前オペラのようなことができると、親しみやすくなるのではないか。

● 文化的波及、成果促進に向けて

・長い期間準備して一回の公演で終わってしまうことが勿体ない。携わった人たちの横のつながりや新人のスキル維持のためにも、中部西部でも公演ができる日が来ればと思う。また、サイズダウンするなどして継続することを検討されたい。

・舞台照明アシスタントについては、公募人数には達しなかった。出演者を含め、公演を将来にわたり持続可能な形にしていくうえでも、後継者の発掘、育成に向けた今後の日常的な取り組みの展開を期待したい。

● 運営面・見せ方に関する課題

・字幕の位置がステージの上過ぎて、字幕を読もうとするとステージのソリストの動きが見えず、ソリストを見ようとすると字幕が見えなくなり話の流れが解らなくなる。客席のどの位置からでも両方が同時に見えるよう工夫することが欠けていた。

・受付での連絡先を記入するための筆記用具の管理が不十分であったのと同時に、個人情報の管理にもう少し配慮があると良いと感じた。

〇その他事業に関する意見、感想など

● 公演継続への期待

・鳥取市出身のプロのオペラ歌手谷口氏を主役のドン・ジョヴァンニ役に迎えるとともに、国内外で活躍するソリスト、合奏、合唱などで多くの鳥取県民の力の結集した全編オリジナル言語による素晴らしいオペラ公演を鑑賞することができ、心豊かな時間を過ごすことができた。こうした取り組みが持続的なものとなるよう心より願う。

● その他

・オーケストラも大変素晴らしい演奏で大いに観客を満足させてはいたが、唯一、レチタティーボに電子楽器が使用されていた事は、とても残念であった。
“観客に本物を伝える”という観点で、電子音によるチェンバロ音の使用には違和感があった。電子楽器の使用については熟考を重ねられての判断だったのだろうか。

（２）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭とりアート 2022 東部地区事業

令和４年 11 月 26 日(土)・27 日(日)とりぎん文化会館

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくり	年齢や障がいの有無に関わらず、より多くの方がアートを身近に感じて楽しんでもらえるよう、様々なジャンルの企画を実施する。(チアダンス、日本舞踊、インクルーシブダンスグループなどのステージイベント、子どもから大人まで楽しめるワークショップ、あいサポート展示など) パンフレットの新聞折込を実施し、より多くの方へとりアートをＰＲするとともに来場を促す。 また、企画実施者にチラシを配布し、口コミによる広報を行う。 地元コミュニティFMを活用し、事前のＰＲ、さらに当日の様子を会場から生配信する。	**達成度：達成** 【成果】 ステージ企画は、障がいや年齢の有無に関わらず、さまざまなジャンルの文化に触れる内容で展開。 ステージ内容に応じて幅広い層の来場者も見られた。スタッフにおいても、視覚障がいをお持ちの来場者が来られた際にも、出入りしやすい場所に座っていただくなどの臨機応変な対応を行うこともできた。 出展したあいサポート関係団体やその家族の来場も見られたが、展示とステージが一体となった会場により、展示だけでなくステージイベントも鑑賞していただけた。 総合して、さまざまな人々にとりアートをより身近に感じていただく環境づくりができたと考える。 また、今回初めて導入したFM 鳥取とのコラボ企画として、会場からの「公開生放送」も従来の広報とは違った角度からのPRとなり、会場にいない方々にも「とりアート」の雰囲気を感じてもらえたのではと考える。 小ホール企画「歌劇の夕べ」も、従来(昨年度／139 名)の来場者数を上回る 227 名の来場者があった。上質な舞台鑑賞の場を提供でき、かつ、「とりアート」の存在をアピールする良い機会ともなった。	**達成度：達成** 【成果】 ステージ企画は障害の有無、年齢の老若に関わらず様々なジャンルのステージ発表が行われた。 観客は家族、知り合いなど多様な関係性のある人で、入れ替わり、常に観客が途絶えることがなかった。 ステージ発表の合間には、展示コーナーを見学するなど、ステージと展示が一体となった会場運営が行われた。 通りすがりの人も足を止めて鑑賞するなど、さまざまな人々にとりアートをより身近に感じていただく環境が出来ていた。 今回導入したFM鳥取とのコラボ企画は、会場にいない人にも「とりアート」を知っていただくことができたと考える。 総合的に考えて様々な人々にとりアートを身近に感じていただくことができたと考える。 ２０周年目という節目であり、これまでの集大成として満足感を高めていた。 チラシの新聞折込は効果があったと考える。
「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	地域団体や教育機関と連携し、これからの鳥取の文化芸術を担っていく若年層の出演・参加を促す。(小学校と関係団体による地域の資源や環境について考えるワークショップ、小学生によるチアダンス、大学生のダンスパフォーマンス、子どもも楽しめるものづくりワークショップなど) 併せて、東部地区小学校、中学校及び特別支援学校等にポスター・チラシを配布し、若年層、親子連れの来場	**達成度：概ね達成** 【成果】 ワークショップは親子連れの参加者が多く、幼いころからアートに触れ、地域の資源や環境問題について考える良いきっかけを提供することができた。 ステージでは、大学生のダンス、小学生～中学生のチアリーディング、そして、日本舞踊、和楽器演奏などにも若い世代の活躍が目立った。	**達成度：概ね達成** 【成果】 ワークショップには親子連れが多く、小さい時からアートに触れる機会となった。 また環境について考えるもの等あり様々な体験ができた。 小学生によるチアダンスや日本舞踊、大学生のダンスパフォーマンスなど若い人のステージ発表が目立った。

		を促進する。	【課題】 ステージ･WS などの実施者には若年層が多く見られたが、来場者においては、若年層・親子連れは少なく、引き続きの課題である。地域団体や教育機関との連携についても同様である。 また、今後、ステージ企画への、若年層の出演機会を増やす際には、ステージの質を落とさないように人材発掘を行うことも必要と感じた。	【課題】 ステージの観客は５０代以上が６０％超であり、女性が６０％であった。若い人、男性が少なく、若い人が関心を持つステージ内容も引き続き検討する必要がある。 まずは会場に足を運んでいただくための方策を検討する必要がある。 伝統芸能等に取り組んでいる子供たちに学校現場からの支援や応援も必要と考える。
「アート」で元気に～地域づくり～	地域における文化芸術に活性化	岩美龍神太鼓や鹿野ミュージカルなど地域で長年活動している団体を招聘し、世代を超えて地域の「宝」の魅力を再認識するきっかけをつくる。 また、日本舞踊、邦楽（箏）のパフォーマンスを実施し、日本古来の伝統芸能に触れる機会を提供する。	**達成度：概ね達成** 【成果】 地元のミュージカル団体や県内在住の優れた作曲家などの地域の「宝」について知る機会を提供することができ、鳥取県の魅力を再確認できる機会となった。 今回の企画内容を通して、地域の文化が継承されている様子をとりアートで見ることができたのではと考える。	**達成度： 概ね達成** 【成果】 地元で活躍する団体を紹介する機会となっており、ミュージカルや伝統芸能、ダンスなど幅広いジャンルの芸術活動が県内に存在することが幅広く知られ、その魅力を発信できた。 「歌劇の夕べ」などを加えることにより、アートの幅広さを伝えることができた。
			【課題】 今後も継続して、郷土芸能の団体に出演をいただくためにも､｢公募｣という形をより積極的に、より対外的に広報・周知し、鳥取で活動をされている団体の方々が参加しやすい、環境づくりを検討していく必要がある。	【課題】 郷土芸能については、公募のみならず、指名依頼することなどにより、普段では見ることのできない地域に埋もれている芸能にも光を当ててほしい。
達成度集計(※５)			（１０／１２）≒８３．３％	（７／９）≒７７．８％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	５０％	４３％	４８％
観客満足度（%）（※６）	９５％	９１％	９２％
入場者数（名）（※７）	２，０００人	１，３６４人	延べ１，５６５人

【自己評価総括】

○成果

・２０周年という節目にふさわしい記念すべき東部地区フェスタになったと思う。コロナ感染予防を行いながら、たくさんの人にアートを感じてもらえる２日間だった。出演者の準備や片付けへの協力もあり、みんなで創り上げるイベントという意識も高まったように思う。レジェンド枠での出演パフォーマンスも好評だった。委員長をはじめアートマネージャー、各委員、事務局も幅広い職種のスペシャリストが参加しており、それぞれの強みを活かした企画や運営にさらに磨きがかかったと感じる。

・今年度もコロナ禍の開催となったが、検温・消毒・連絡先の記入など、来場者に呼びかけることで安全に、楽しくアートに触れることができるイベントにすることができた。

○課題

・あらゆる文化を盛り込んだと言いながら、本当の若者の文化を取り込めているわけではない。そういった人材を受け入れることを含めて、より若い感性でイベントを作ることを意識する必要がある。

・年間を通して、とりアート東部で育成していける何かができればよいが。広報の強化、デジタル環境、生配信等は今後目指したいところである。パンフレット等も QR コード化するなどを考えていくことが必要かと。

・どの企画もすばらしく、さらに多くの方々に見てもらいたいと感じた。早い段階での広報や、委員個人の SNS の活用などによって広く新規来場者の獲得に努めたい。

○その他事業に関する意見、感想など
・ラジオのサテライトなど新しいことに挑戦し、少しずつアップデートを繰り返しているので、より多くの人に周知して、運営、ボランティア、参加者、お客様、様々な県民の皆様に参加して欲しい。
・初めてとりアートに参加したが、委員も来場者も楽しそうで、芸術やアートの魅力を再認識した。今後はさらなる新規来場者の獲得により、自分のようにアートの楽しさ・魅力に気づける人を増やしたいと思った。会場が一体となってアートイベントを開催することにより、目当ての催事（例えば展示など）の鑑賞のみならず、ステージ・ワークショップなど連鎖的に鑑賞・体験する機会になっていると感じた。

【委員評価総括】

○成果
・20 周年という節目の年であり、関係者の意気込みが感じられた。
・コロナ禍での開催であったが、会場内で数か所の検温・消毒・リストバンドなど来場者に呼びかけるなどコロナ対策が講じられていた。
・文化芸術に気軽に触れ合える２日間であった。
・オペラ・ミュージカルのライブ感のあるステージが素晴らしく、アート活動の奥深さを伝えることができた
・満足度が 91.0%と高評価であり、昨年より評価が高い。演奏、歌唱、演技の質に満足したという声が一番多い。
・初めて見る人が約半数ということで新たな観客が呼びこめている。
・参加者の満足度が非常に高い。
○課題
・若者が参加したくなるような企画を考える必要がある。また若者に情報が届く方法を検討する必要もある。
・初めて見る人が約半数、数回が約３割という結果から、リピーターを増やすことも必要。
・26 日（土）のステージ企画は、演目ごとの間が長くとられていたので、若干の間延び感があった。今後の課題として対応されたい。
○その他事業に関する意見、感想など
・参加者が女性の比率が高く、50 代以上が６割という結果であり、若者の発表の機会としての検討が必要と考える。
・イベントを知る手段が、友人知人からが多いということは、口コミの力を強化することも必要と考える。
・ラジオのサテライトなど新しいことに挑戦し、少しずつアップデートを繰り返すことにより周知に努めている。
・詩集をテーマにした文学系の若者との出会いが刺激的であった。
・絵画などの制作者・表現者との会話ができたことが満足度につながった。

（3）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭とりアート 2022 中部地区事業

令和４年 11 月 19 日(土)・20 日(日)倉吉未来中心

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくり	県民参加型の文化祭及びアマチュア文化活動者の発表の場として、アクセスしやすいオープンスペースを会場に 20 企画、照明や映像などの演出を加えやすい会議室･小ホールを会場に5企画の計 25 企画を計画する。 ジャンル別では、音楽系 8 企画、舞踊・ダンス系 5 企画、郷土芸能・伝統芸能系 4 企画、演劇系 3 企画、展示・ワークショップ・その他として 5 企画とし、多様なジャンルの企画により、年齢や性別を問わず気軽にアートに親しむことを狙いとする。 また、20 回目の節目の開催にあたり、委員会として久しく出演がなかった団体や新規団体に参加を呼びかけ、7 団体（和太鼓、獅子舞、バトントワリング、邦楽演奏、詩吟、人形劇、二胡）を招聘する。 さらに、地域で活動が盛んなアマチュアバンドライブを中核企画とし、男性客の来場を促進する。	**達成度：達成** 【成果】 中部地区委員会主導の下、久しく出演がなかった団体の招聘や継続実施している育成企画、そして昨年出演が実現しなかった郷土芸能企画まで、音楽・舞踊・伝統芸能・演劇・展示等計 5 ジャンル 25 企画で構成し、偏りの少ないバランスの取れた内容とすることが出来た。 会場も気軽に鑑賞可能なアトリウム（オープンスペース）をメインとし、落ち着いた視聴環境のセミナールームから照明や映像の演出が可能な小ホールまで、企画に合わせた設定とし、倉吉未来中心館内の様々な場所で多岐にわたるアートに触れることの出来る催しとした。	**達成度：達成** 【成果】 コロナ禍の中ではあったが、企画に合わせた場所配置や音響・演出も含め会場の環境をフルに活かしながら、バリエーション豊かなジャンルの 25 企画を計画どおり実施した。それにより、県民参加型の文化祭及びアマチュア文化活動者の発表の場として、年齢や性別を問わず誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくりが図られた。 特に、晩の時間帯にアマチュアバンドライブを実施し新たな客層を取り込むことに成功するとともに、昨年出実現しなかった郷土芸能の出演や久しく出演がなかった団体、新規団体の参加が実現するなど事業者の工夫や努力の跡が成果として現れていた。
		あいサポートアートセンター協力の下、コロナ禍ではあるが積極的にアート活動に取り組む障がい者団体 2 組（はーとぴあ創造、ダンスユニット SAN）を招聘し、障がいの有無に関わらず、一つの催しの中で日ごろの活動の成果を発表する機会を設け、障がい者のアート活動の活性化の一助とする。 また、鑑賞サポートとして手話通訳を配し、聴覚障がい者の来場にも配慮する。	**達成度：概ね達成** 【成果】 継続出演している団体ではあるが、計画通り障がい者団体 2 組を招聘し、日ごろの活動の成果を披露する機会を設けた。継続していることでレベルも向上し、企画の質も向上している。 また、昨年に続き手話通訳を導入し、聴覚障がい者の来場にも配慮を行った。 【課題】 中部地区では舞台芸術に取り組む障がい者団体が少なく、出演団体が限られつつ	**達成度：概ね達成** 【成果】 あいサポートアートセンター協力の下、アート活動に取り組む障がい者団体 2 組について日頃の活動の成果を発表する機会を設け、障がい者のアート活動の活性化の一助とすることができた。 「即興音楽とダンスのワークショップ」など障がい者を含め子どもや高齢者など誰もが共に参加しやすい企画を設けるとともに、鑑賞サポートとして手話通訳を配し聴覚障がい者の来場にも配慮するなど、誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくりに一定の成果をあげることができた。 【課題】 手話通訳者と出演者・スタッフの動線が重なるなど、一部で支障が生じてい

			あることから、美術系にも目を向けるなど、新たな参画を探っていく。 また、手話通訳により聴覚障がい者への配慮は出来たが、その他の障がい者への配慮はまだまだ不足している。障がいの有無を問わず文化芸術に親しむことが出来るよう、可能な限りの配慮を講じていく必要がある。	た。手話が常に観客にきちんと見えるような立ち位置や出演者・スタッフの動線をあらかじめ決めておくなど一層の配慮が必要である。また、踊り、詩吟など手話ではなく活字で示したほうがわかりやすいと思われる演目もあり、鑑賞サポートの方法の検討も期待したい。
		来場を呼びかける主な広報として、中部地区日本海新聞購読世帯28,000戸へのイベントプログラム新聞折り込みを行う。 加えて、鳥取中央有線放送による出演団体への事前取材を中心とした特別番組の放送を行う。また、各企画毎にチラシを作成し、出演者を中心とした口コミ広報をおこなう。 加えて、本番に先駆けて展示企画（これまでの歩みやステップアート原画展示）を先行実施し、本番へ向けた機運の醸成を行う。	**達成度：概ね達成**	**達成度：概ね達成**
			【成果】 中部地区日本海新聞購読世帯 28,000 戸へのイベントプログラム新聞折り込みを中心に、練習風景を取材した地元ケーブルテレビによる事前告知番組など、中部地区を中心に広報を展開した。 さらにこれらに加え、倉吉未来中心館内に設置した「ステップアート」の新聞紙面での取り上げや本番に先駆けて実施した先行展示企画などにより、本番への機運醸成に繋がった。	【成果】 イベントプログラム新聞折り込みを PR の中心に、練習風景を取材した地元ケーブルテレビによる事前告知番組の放映などの広報を計画通り実施し、目標を上回る延べ 2,648 人の入場者があった。 「ステップアート」など本番に先駆けた展示企画は来場者の目に触れることで本番への機運を高める優れたアイデアだった。
			【課題】 アンケート集計より「チラシ・新聞折込」が情報入手先の上位となり、展開した広報策に一定の成果はあったが、一位はやはり出演者等からの口コミであった。このようにアマチュアが出演する催しでは出演者・関係者からの口コミ宣伝が不可欠であり、中には率先して集客に取り組んでいた団体もいたが、個々の企画の集客の積み重ねが催し全体の集客へとつながることを出演者にも意識してもらう必要がある。 また、SNS の運用にも取り組んだが、SNS の肝である「旬な情報をリアルタイムに発信すること」を本業の傍ら活動する委員に求めるのは酷であり、ツールとして効果的に使うには知識も必要となる。 これらのことから、催しの性質を踏まえた広報策を着実に行うことが集客につながるものと考える。	【課題】 口コミだけに頼ることには広がりに一定の限界はあるものの、アンケート集計では、出演者や家族・友人を通じてイベントを知った者が上位となっている。出演者の集客に対する意識づけや広報用素材の作成などを通じて口コミ宣伝をうまく広報手段の中に盛り込むことで、より多くの集客につなげることを期待する。

「アート」が育む・「アート」を育む ～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	中部地区委員会として次世代の育成をテーマに掲げ、アート活動に取り組む子どもや学生が出演・出展する企画として 9 企画（書道パフォーマンス、合唱、管楽器演奏、音楽劇、キッズバンド、バトントワリング、ジャグリング、絵画展、ステップアート）を企画する。 また、参加型企画として 2 企画（即興音楽とダンスのワークショップ、人形劇）を企画し、計 11 企画により、子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会を充実させる。	**達成度：達成** 【成果】 次世代育成を企画の中心に据え、行動計画に沿って様々なアートジャンルで子どもや学生が出演・出展する企画、参加型企画を提供することが出来た。 特に、昨年も出演した若手の劇団は朗読劇から音楽劇へ発展しており、このようなことからとりアート中部が目指す次世代の育成の場となりつつあると感じる。	**達成度：達成** 【成果】 次世代育成というコンセプトのもとに、教育現場等との協力関係を構築し、参加型企画を含む多様な企画を計画通り展開する中で、多数の子どもや学生の参画がみられ、子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会を提供することができた。 中でも昨年育成企画として生まれた「ウインドアカデミー@サックス」の取り組みは、継続して実施することで参加者も増え、とりアートの事業成果として評価できる。
		中部地区委員会独自の次世代育成企画として、子どもたちが学校や年齢を越えて集い、専門家の指導を受けながら音楽に親しむ「中部少年少女合唱団 MIRAI」と「中部ウインドアカデミー@サックス」の 2 企画に取り組む。合唱団 MIRAI は 2009 年から、ウインドアカデミーは2021 年からの育成企画として継続しており、7 月から約 4 ヵ月間定期的にプロの声楽家やサックス奏者の指導を受け、とりアートのステージで成果発表を行う。 どちらの企画も事業予算上単年度企画であるが、中部地区内の全小学校・中学校・高校への案内を通じて学校や年齢を越えて多くの子どもたちが参加しており、子どもたちの地域での貴重な音楽活動の場となりつつある。また、ウインドアカデミーでは学校の協力の下、使用していない楽器を借用することができ、楽器を持っていない生徒や未経験者の参加にもつながっている。 また、園児・児童を対象とした「未来をえがこう！絵画コンクール」も継続開催し、「未来」をテーマに自由な絵画作品の創作を通じて子どもたちの感性を養うとともに、中部地区小学校図工部会教諭の審査の下各賞を設け、参加意欲の向上へとつなげる。	**達成度：達成** 【成果】 今年も「中部少年少女合唱団 MIRAI」「中部ウインドアカデミー@サックス」「未来をえがこう！絵画コンクール」の 3 つの育成企画に取り組み、コロナの感染状況に左右されながらも無事本番を迎えることが出来た。 まず、長年継続している「合唱団 MIRAI」や「絵画コンクール」においては歌唱や作品のレベルが上がっており、継続している成果が出ている。 一方、2 年目となる「中部ウインドアカデミー@サックス」においては、参加者が昨年の 9 名から 14 名に増え、昨年の参加者を中心に上級生が下級生をサポートする姿や、普段の部活では体験できないアンサンブルに意欲的に取り組む姿など、自主的で積極的な様子が見受けられ、学校や学年を超えた交流を通じて切磋琢磨していた。 また、学校の協力の下普段使用していない楽器を借用することができたため、楽器を持たない生徒や、学校外の活動の場を求めている生徒に機会を提供することに繋がった。	**達成度：達成** 【成果】 今年度も子どもたちが学校や年齢を越えて、専門家の指導を受けて音楽に親しむ取組みや園児・児童を対象とした絵画コンクールなど様々な工夫を凝らした継続的な取組みを計画通り実施した。その取り組みにより、レベルの向上や未経験者の参加につなげるなど「とりアート中部」がテーマとして掲げる次世代育成に着実に成果をあげ、「アート」が育む･「アート」を育む～人づくり～の一翼を担うことができた。

「アート」で元気に～地域づくり～	住民が地域の宝に触れたり、良さを認識したりする機会の創出	昨年からの継続課題としていた郷土芸能企画として、北栄町に伝わる瀬戸獅子舞を招聘した。 加えて、久しく出演が無かった和太鼓や邦楽演奏、初出演の詩吟などを招聘し、地域に根付いている芸能や祭事以外では目にすることがない貴重な芸能に触れる企画を盛り込み、地域の文化資源や日本の伝統文化に触れる機会とする。	**達成度：達成** 【成果】 近年はコロナの影響（練習・活動機会の減少）で出演が叶わなかった郷土芸能・伝統芸能団体に早期から声を掛け、結果、一部辞退した団体もあったが、計画通りに郷土芸能・伝統芸能企画を組み込むことが出来た。 特に、瀬戸獅子舞は地元の神事でしか見ることが出来ない貴重なもので、オープンスペースでの実施も相まって、たまたま立ち寄った人も含め、地域の文化資源に触れる機会を提供できた。	**達成度： 達成** 【成果】 昨年からの継続課題であった郷土芸能・伝統芸能について早期から出演依頼を掛けるなど意欲的に取り組むことにより、北栄町に伝わる瀬戸獅子舞に加えて和太鼓や邦楽演奏、初出演の詩吟などを招聘し、地域の伝統芸能の継承に取り組む団体などの発表の機会を提供することができた。 練習を重ねた出演者の熱演が観客に感動を与えるなど、地域の文化資源や日本の伝統文化に触れてその良さを県民に伝えることができた。
達成度集計(※５)			（１６／１８）≒８８．９％	（１６／１８）≒８９％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	３０％	６４．７％	２９．２％
観客満足度（%）（※６）	９０％	９３．５％	９３．８％
入場者数（名）（※７）	のべ２，５００人	のべ２，６４８人	のべ２，６６９人

【自己評価総括】

○成果

・引き続きコロナ禍での開催であったが、県内の感染状況を見ながら、感染症対策を何度も修正しながら準備を進めてきた。マスク着用、観客席の間隔、消毒など必要な対策を継続するとともに、ステージ出演者のマスク着用の緩和、企画間の転換時間縮小など、制限と緩和のバランスを取りつつ、県民に広く文化芸術に触れてもらうことを念頭に催しを開催することができた。

・委員会主導で出演者を選出したことで、多様なジャンルの企画を実施できた。また近年出演がなかった団体や、初めて出演する団体もあり全体的に目新しさを打ち出せた。

・委員会が取り組む育成企画において、参加している子ども達（学生）が自主的に取り組む姿が見受けられ、技術を磨くことはもちろん、団としてのチーム力や個々の人間力に成長が感じられる場面が多く見受けられた。

・アトリウムステージにおいてプロの司会者を起用したことで、スムーズな進行や的確なアナウンスとなり、催しの質の向上につながった。

○課題

・中部地域の文化資源や活動団体は決して数が多いものではなく、毎年実施していく中で、どうしても目新しさが無くなってしまう。広く知られていない団体や活動・企画の掘り起こしと同時に、既存の団体や企画をいくつか集め新しい企画を生み出す取り組みなども必要である。

・集客について、アマチュア主体の催しであるため、出演者・関係者個々の口コミ宣伝による集客が核となるが、参加団体が自分達の企画の広報だけでなく、とりアート全体の広報活動に力を入れてもらえるような仕組みを構築することが必要である。

・障がい者への配慮として手話通訳を取り入れているが、広く開かれた催しとして、可能な限り他の障がい者への配慮も必要である。

・同じく障がい者の参画について、舞台芸術以外の活動にも目を向け、より多様な形でとりアートに関わってもらうことが必要である。

○その他事業に関する意見、感想など

・実行委員は本業を抱えた上でのとりアートでの活動であるため出来ることには限界があり、事業が活性化するにつれその負担も増える。長年の課題である若手の参画も含め、実行委員の役割について今一度整理する時期が来ていると感じている。

【委員評価総括】

○成果

・コロナ禍の中ではあったが感染防止対策を適切に講じつつ、ステージイベントを中心に計画通りの 25 企画を実施し、幅広いジャンルで幅広い世代の参画を図るとともに、入場者数、観客満足度、アンケート回収率の 3 つの定量目標をすべて上回るなど、県民参加型の文化祭及びアマチュア文化活動者の発表の場として、年齢や性別を問わず気軽にアートに親しめる「とりアート中部」として成果をあげた。アンケート回収率ではアンケート記入と引き換えに記念品を渡すなどの工夫も功を奏し昨年の実績を 35 ポイント上回る結果となった。

・「中部少年少女合唱団 MIRAI」、「中部ウインドアカデミー@サックス」など子どもたちが学校や年齢を越えて集い、専門家の指導を受けながら音楽に親しむ取組みや、園児・児童を対象とした「未来をえがこう！絵画コンクール」などの継続的な取組みをはじめ、アート活動に取り組む子どもや学生が出演・出展する企画や子どもたち向けの参加型企画として 11 企画を実施すること等により、「とりアート中部」がテーマとして掲げる次世代育成につなげるとともに、家族連れの入場を含む多くの子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会を充実させることにつながった。合わせて、高校生が運営スタッフとして参加するなど、運営面でも次世代育成につなげる取組みとなっている。こうした取り組みを通じて他の地域でも参考になる成果をあげている。

・体温のチェック、連絡先の記入、マスク着用、観客席の間隔、手指の消毒、小ホールの入場の際の足元に並ぶ間隔のテープなど徹底した新型コロナ感染防止対策が施されるなど安心して参加できるイベントとなった。

・アトリウムにワークショップコーナーやステージを配置して来館者が立ち寄りやすい雰囲気作りを行うなど、企画に合わせた場所配置や音響・演出も含め会場の環境をフルに活かしながら、バリエーションの豊富さに様々な年齢層のアート、芸術の表現に出会える機会の場が提供されており、昨年とはまた一段と違う目新しさがあった。また、作品展示を１階に配置したことで昨年度よりも見に行きやすくなり、多くの来場者が鑑賞していた。

○課題

・観客の年齢層の多くが年配の方で占められており、若い世代の集客に一層力を入れる必要がある。若者の新聞やテレビ離れが叫ばれる中、若年層を観客として呼び込むために、外注を視野に入れるなど SNS の運用方法の検討を含めマスメディア以外の広報を模索する必要がある。

・広報について、口コミだけに頼ることには広がりに一定の限界はあるものの、アンケート集計では、出演者や家族・友人を通じてイベントを知った者が上位となっており、出演者の集客に対する意識づけや広報用素材の作成などを通じて口コミ宣伝をうまく広報手段の中に盛り込むことで、より多くの集客につなげることを期待する。また、これまでの広告媒体にプラスして時代に合わせたプロモーション活動を検討していただくよう期待したい。

・聴覚障がい者への鑑賞サポートとして手話通訳者が配置されているが、手話が常に観客にきちんと見えるような立ち位置を検討するなど一層の配慮が必要である。また、様々な障がい者への配慮についても、難しい課題ではあるものの今後可能な限り検討していただくよう期待したい。

○その他事業に関する意見、感想など

● 運営面についての意見・感想

・昨年の指摘がフィードバックされていた。チラシを入れる袋もなくなり、来場者に渡していたお菓子もアンケート記入と引き換えになり、アンケート回収も増え工夫が良かった。

・イベント全体のタイムスケジュールや実施場所がどこで会場内のどこにあるのかといったことが分かりにくかった。会場のわかりやすいところにプログラムの案内版があると親切。

・ステージイベントは多様なプログラムが展開されるとともにプロの司会者を起用したことで、スムーズな進行や的確なアナウンスとなり、非常に充実したものとなっていた。一方、今年のアンケートでもプログラムの幕間を長く感じておられる観客もあり、間の 15 分にも観客を楽しませる一層の工夫を期待したい。

・手話通訳はあえていらないのではないかと思われる演目もあった。踊り、詩吟など、歌詞が決まっているものは活字で見せても良かったと思う。

・ステップアートと同様に絵画展も先行実施すれば開催気運の醸成につながるのではないか。

・とりアートは、メイン開催は２日間だが、それまでの別の日に、例えば中部地区青少年郷土芸能など盛り上がりのある団体が発表するステージ企画があってもいいかなと思った。

・更なる発展に向けて、魅力的な企画の充実、質の担保、「とりアート」の知名度の向上が望まれる。

● イベント構成・内容についての意見・感想

・ハンドメイドワークショップが例年より少なく寂しい印象だった。もう少し多くの出店が望まれる。

・とりアートの事業として、ワークショップは必要だ。当日を迎える前にクリニックをすると良い。

・認知度、活動が元気な出演者の場合と認知度のない団体ではかなり観客数に差があった。伝統芸能（太鼓、獅子舞）のステージでは、始まってから音を聞いてお客様が増えていた。伝統芸能に関心のあるお客様はまあまああるのだと思った。企画としてはアクセントになって良かった。関心の薄いジャンル（邦楽、詩吟）は、もう少し地域で育てる仕掛けが必要ではないだろうか。または、短編でコラボするとか、刺激のある見栄えや演出も必要ではないだろうか。

・子どもの発表を見た後に退館する保護者層も多く、一気に観客が減るのが残念である。

● 個別の企画についての意見・感想

・障がい者団体 2 組の発表では、コロナ禍にあっても、アート活動に励み、出演を継続出来ていることは評価出来るし、アンケートでも「感動しました」との声も聞かれた。今後は、新しい団体の出演も望まれる。

・二胡コンサートでは複数団体が協力してそれぞれの持ち味を発揮する企画となっており、満室となっていた。意欲的な活動の盛り上がりを評価したい。また、ワークショップもあり、これから始めてみたいと思っている人のサークル選びの参考にもなったのではないか。演奏終了後にワークショップを実施することについての事前の告知があればさらに良かったのではないか。

・「劇団星のふる町」は、歌もダンスもレベルが高く楽しめた。客席数の限られるセミナールームでの発表は勿体ないと感じ、来年は小ホールでの開催を期待したい。

・「えんとつ町のプペル」は全国的に人気で話題性もあり、若年層にも興味を広げていた。
・「合唱団 MIRAI」と「ウインドアカデミー」は、音楽というジャンルで、学校とのつながりが出来ている。素晴らしい取り組みだと思う。
・音楽のライブステージは久しぶりに爆音、生演奏のライブ感ビート感を肌に感じた。演者の方々からパワーや元気をいただいた。
・「Midnight Drinker Live vol. 3」はホール内が熱気に溢れ、声こそ出せないものの、出演者も来場者も楽しんで場を盛り上げようとする空気感が心地良かった。若者層を中心に新たな客層を取り込むことに成功したのではないか。バンドのレベルも高く、今後の発展として、とりアートの一環で別の日に企画されることを期待したい。それには予算的な支援も必要だろう。
・未来を描く絵画展では、賞が沢山有って、それぞれに審査基準が有ることを知った。夢のあるタイトルも作品も素晴らしかった。クラスで参加、個人で参加いろいろな参加スタイルがあった。作品制作までに開催者からプレゼンがあるといいなと思った。
・アンケートでリクエストのあった中部地区青少年の郷土芸能の祭典も機会があれば、ぜひ「とりアート」で企画として拝見したい。
・「即興音楽とダンスのワークショップ」は誰もが参加しやすく、一緒に活動しやすい企画となっており、障がいのある方を含め子どもや高齢者などが一緒にアートを楽しんでおられたのが印象的であった。

● その他の意見・感想

・とりアートの理念にそった良い事業だと思われる。その場かぎりの満足ではなく、形が残る取り組みこそ「とりアート」ではないだろうか。
・出演者や出演団体関係者が、自分たちの発表後も館内でほかの企画に参加出来るような仕組みがあれば、滞在時間が長くなり、さらなる賑わいが創出されるのでは。各企画の横のつながりも今後は期待したい。
・高校で邦楽に触れる授業があるので、そこからクラブ活動が始まり、とりアートで発表。何か仕掛けはできないだろうか。例えば、過去には中部地区にも吟舞部のある高校があった。

（4）第 20 回鳥取県総合芸術文化祭とりアート 2022 西部地区事業

令和４年 11 月 12 日(土)・13 日(日)米子市児童文化センター

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	日頃、文化芸術を鑑賞していない、活動をしていない人も文化芸術を気軽に楽しめる機会の提供	アートに触れる機会がより広く届くように、アウトリーチのようなカタチで普段気軽にこどもや親子が訪れている児童館を会場に選定する。こどもたちにもわかりやすいアートを題材にすることと、単に鑑賞するだけではなく、体験を伴うようなプログラムを創造することで、アートへの敷居を下げ、関心を膨らませて今後につなげる。 （数年来西部地区が大切にしてきた、体験型アートを再度復活し、体験を重ね、アートに触れる機会を増やしていくことを改めて行う） 今回は、全国で親世代も楽しめるわらべうたを通して活動している“坂野知恵”氏（2018 年にも参加）を基軸に、ふれあいを大事に山陰で音楽活動をしている“マイトリー”と、同じく絵画創作で活動している“朝倉弘平”氏のアーティストに声を掛け、各々の専門と、お互いが協働するプログラムを創っている。 （３者は西部地区事業での実績もあり、チャレンジングな企画を実施するための選定）	**達成度：概ね達成** 【成果】 米子市児童文化センターでの開催は、行動計画にも挙げたように「アートに触れる機会がより広く届くように、アウトリーチのようなカタチ」での実施となり、普段気軽に遊びに来ているこどもや親子がその延長で楽しんでもらえたと思い、効果的な方法と考える。 今回の開催により、プラネタリウム（児童文化センター）を利用したプログラムを、年数回にわたっての定期的な開催を望む意見をアンケートでいただけたことは、会場の選定方法・プログラム内容などから、アートを普段から楽しんでもらう環境づくりのヒントになったと思う。	**達成度：概ね達成** 【成果】 児童文化センターという親子で訪れやすい場所を会場に選んだことは良い選択であった。この選定は今回の目標を達成するのにふさわしく、さまざまな年齢層の参加者が足を運んでいたようにみえた。 会場は普段から親子で気軽に訪れている場所であったので、普段「アート」になかなか接する機会のない参加者が気軽に楽しみながらアートに触れ、関心を持つきっかけとなった。 わらべ歌のコーナーでは、子どもたちが生き生きとわらべうたに親しんでいる姿をみることができ、またプラネタリウムの中での体験も工夫されており、来場者の満足度も高かった。 参加理由として「内容に興味があった」の回答割合が圧倒的に高かったことは、企画の良さを裏付けているのではないだろうか。
			【課題】 コロナ感染対策のため、会場に入場者の縛りがあると集客が困難になる。実際お断りする事態が発生することになった。その対策も考えるべきであった。 感染対策のためもあり事前予約制をとっていたが、当日の参加が予約数の９割程度と、１割程度のロスがあり、会場選定の理由としての普段から利用されているこどもや親子に対して、当日参加できる柔軟性を準備できなかったことは、会場選定の主旨と結果にズレを生じてしまった。	【課題】 コロナ感染対策を考え、ほとんどのイベントが事前予約制であったのは評価できるが、参加を断らざるを得なかったケースについては、予約者全員が参加できていないという実態もあり、当日先着順で参加を認めるなどの対応が考えられる。開催当日、児童文化センターの広場ではたくさんの親子連れが遊んでいた。当日の申し込みに対応できなかったことは、「気軽に」来場した参加者がプログラムに参加できず、この会場を選定した意図をうまく反映できなかったことにもつながる。 ターゲットである「日頃、文化芸術を鑑賞していない、活動をしていない人」が今回の参加者の中でどのぐらいいたのかがアンケートからは分かりにくく、取組目標の達成度が評価しにくい。

「アート」が育む･「アート」を育む ～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	ステージ鑑賞から体験型アートまで、関わるアーティストが単独でプログラムを行うのではなく、協働したプログラムも創る。そのため、体験したものが鑑賞する対象にもなり、体験と鑑賞がつながるイベントとなることを目指す。結果、気軽に参加でき、また幅広いアートの世界を体験できるようにする。 今回は、わらべうたあそびを体験しつつ、プラネタリウムとのコラボによる、異色なステージを鑑賞して、わらべうたの世界観にひろがりを体験する。また、音探しのワークショップの体験は、異種アーティストのコラボライブペイントステージによって、自分にはなかった感性を体感するためのきっかけをつくり、体験から鑑賞によって発見の機会を増やし、楽しむことがよりできるように工夫している。	**達成度：概ね達成** 【成果】 プラネタリウムと様々なジャンルのアートを掛け合わせることで、単独での実演から更に、より一層魅力的なものとなり、参加者の関心を高める企画を実施することができた。 また、アンケートの記述からは、子どもの意外な反応や興味関心に対する感想も多く、アートを通じて子ども達に想像力を広げる機会を提供することができた。 【課題】 申込者は、プログラムごとに単発で申込むケースが多く、また当日参加が可能なものが少なかったため、「体験から鑑賞の流れによってアートをより楽しんでもらう」という当初の意図が実現できたとはやや言い難い。 また、親子向けにターゲットを絞り、その層を獲得することができた一方、より幅広い年齢層に興味をもってもらえるような工夫が必要であった。	**達成度：概ね達成** 【成果】 体験と鑑賞のバランスが良く、子どもも大人も貴重な体験ができる内容だった。特にプラネタリウムとのコラボレーションは今回ならではの企画であり、その静寂した幻想的な空間を活用したのは、主催者のねらいの達成に向けてのとてもよい企画だと感じた。その場の持つ力が、それぞれのアートが持つ力を増幅させていた。アンケートでも好評を得ていることから、今後も継続しても良いように思う。 複数のアーティスト達のコラボレーションにより、発展的なプログラムができていた。 音探しのワークショップでは、「自分にはなかった感性を体感」し、大人も子どもも楽しめていたことが参加者の表情からうかがえた。魅力的な体験が感動につながるパフォーマンスであった。 【課題】 体験から鑑賞の流れを意図していたのであれば、チラシに記載し、もう少し宣伝の際に周知しておくと良かったかもしれない。 また、昼食をはさむというプログラムもあり、親子そろって長時間参加するのはなかなか難しかったのではないだろうか。
		こどもがアートを体験するためには、親（保護者）の関心と協力は必須である。そこで、親にも興味関心が寄せられるプログラムを提供することで、こどもの参加の機会を増やす工夫をする。［こどもに寄せる（こども向けにする）のではなく、こどももでき、大人も楽しめるものとし、結果、幅広い世代へと届くプログラムを提供する］ 今回は、本来貸し館となっていないプラネタリウムをお借りし、異色なコラボステージを企画。広い世代で知っている「星の王子さま」の朗読劇は、対象をこど	**達成度：概ね達成** 【成果】 朗読劇は、事前予約開始から間もなくして定員に達するなど、大変関心が寄せられたプログラムとなった。当日は天候が悪化し、予定よりも来客が減ってしまうことも危惧されたが、予定数に近い来客となり、関心の高さがうかがわれる。 題材も、親子で楽しめる「星の王子さま」ということで、大人の関心を得ることにより、大人がこどもと一緒に楽しむことで、こどもへの「アート」をはぐくむ基盤づくりにも寄与できたと考える。	**達成度： 概ね達成** 【成果】 朗読劇も、くらやみライブも、演者のみなさんが実力がある上に、プラネタリウムの幻想的な雰囲気と相まってすばらしい内容となっていた。 朗読劇が事前予約の段階で定員に達したことや、アンケートで好評を得ていることから、この企画は成功といっても良いのではないだろうか。

		もを主体としたものではなく、親子でも一緒に見てもらいたいプログラムになっている。	【課題】 朗読劇は事前予約開始後間もなくして定員に達したところで追加公演を検討するなど、更に鑑賞する機会を検討することも必要だったかもしれない。(ただし、今回は貸し館ではないプラネタリウムでの実施だったため追加公演は困難であったのもあるので、今後の課題として) なお、当日は予約数の9割程度の入場となり、事前予約制ではあったが、事前清算などで参加者数を確定出来ていたわけではないので、当日会場での受付締切時間などに制限を設け、当日の参加枠を受け入れる準備をしておくことも必要であった。	【課題】 事前予約制という縛りを設けられたのはやむを得ない方法だったが、当日の参加枠を準備しておく必要があった。 参加アーティストは人気も実力もあるグループなので、たくさんの固定したファンと思われる方も参加していた。一方で、幅広く多くの方にアートに親しんでもらいたいというねらいを達成するためにはどうすべきか考えさせられた。
		プログラムの実施場所は、プラネタリウムや施設周辺の外部、ホールであれば自由な姿勢で鑑賞できるスタイルとするなど気軽に参加できるものとし、普段のこどもの行動をベースに、気構えることなく参加できるプログラムを実施する。 今回企画しているライブペイントのステージは、異種のアーティストによるコラボレーションにも注目だが、2019年に行った、ピアニストと絵描きのライブペイントステージのように、こどもたちが寝そべりながら（自由な姿勢で)、徐々にアーティストへ近づいて目を輝かせて鑑賞していたステージを目指す。	**達成度：概ね達成**	**達成度： 概ね達成**
			【成果】 スペシャルステージでは、こどもから大人まで、幅広い年齢層の方が楽しめた。 出演アーティストがこどもたちとの接し方について経験が豊かであることにも助けられ、こどもたちに制約を与えることなく、自由に鑑賞をできる機会を提供できたことは、気軽にアートに触れる機会になったと思う。 なお、自由な姿勢での鑑賞については、過去実施したステージプログラム（2019年度の回）での経験を活かしていること、また、施設の特性を活かしたものとなった。	【成果】 会場の内外を存分に活用したプログラムを実施されており、それが全体的な高評価につながっているように思う。室内と屋外それぞれの良さが生かされた企画が多かった。 プラネタリウム内で座席を倒しての鑑賞は、ゆったりとした雰囲気のなか、想像力を膨らませ、歌の世界観や朗読劇の世界観にひたることができた。アーティスト達は子どもと接するのに慣れていて、過去の経験をふまえ柔軟な進行・対応ができていたと思う。
			【課題】 スペシャルステージでは、開場から開演までの時間設定に配慮が必要であった。会場前の混雑を避けるため、早めの開場を行ったが、開演までの時間が少し長くなってしまい、小さいこどもが動き出してしまった。 また、固定席がなく自由な姿勢での鑑賞を可能とした客席スタイルだったため、小さいこどもには実演時間が少し長くなった様子で、会場内が少しざわついてしまった。 終了後のアーティストへのヒヤリングでは特に問題がなかったとのご意見をいただいたが、こどもたちが落ち着かなくなった場合の対処方法、もしくは、設定時間についての考慮が必要。	【課題】 入場開始時刻については、工夫すれば時間調整が出来たように思える。 今回は自由な姿勢での鑑賞や、プラネタリウムで座席を倒して鑑賞してもよいプログラムが多かったが、自由な雰囲気を大切にした時点で、子どもの行動については想定範囲であるように思う。むしろ、必ずしも自由な姿勢での鑑賞＝気軽というわけではなく、参加者が無意識に惹き込まれるプログラムをぜひ企画していただきたい。

「アート」で元気に～地域づくり～	地域における文化芸術に活性化	県外で活躍するアーティストを加え、地元のアーティストと共にプログラムを創り上げることで、地域文化の活性化を促す。 今回は、前項にも記載の「坂野知恵」氏を基軸に、地元で活躍する「マイトリー」、「朝倉弘平」氏、「演劇Project Bee」との協働によって、鑑賞者の関心を広げることを目指す。	**達成度：概ね達成**	**達成度： 概ね達成**
			【成果】 西部地区の企画コンセプトに則った地元アーティストとともに作り上げる過程は、会場となった児童文化センターに訪れる親子のみならず会場職員とのアート活動の場になり、地域文化の活性化のいったんとなった。	【成果】 地元のアーティストと協働してプログラムやステージを作り上げていくことは地域文化の活性化につながっていく。そういった意味でアーティストの知名度や活動内容が地元住民に広く知れ渡ることは重要なことである。今回の出演者は、単独でも十分楽しむことができる、実力も人気も高い方ばかりであった。そこに、コラボを仕掛けたことは、何か新たに生み出すことを期待させるおもしろい取り組みだった。 今回いずれのプログラムでも子どもたちが楽しそうに参加していたことや、終演後に多くの参加者が出演者と歓談していた様子を見ても、本イベントは演者・参加者・企画者いずれにおいても有意義な場であると感じた。また“わらべうた”を身近に！のコンセプトの下、アーティストとわらべうたスタッフとの親しい関係性が特に功を奏していた。
			【課題】 入場制限という縛りを踏まえ、回数や当日の入場に配慮が必要だった。 開催時期についても、11月前後は文化芸術に関するイベント等が活発な時期であり、学校でも発表会などが重なってしまうため、地域の活性化を目的とする上では、少し時期を外すことも有効性があると考える。 なお、今回の取り組みが今後どういう効果があるのかを検討すべき。	【課題】 今回は同じアーティストや団体が２日間のプログラムやステージに出演されていた。そのメリットは多く考えられるが、ここ数年、毎年のように出演している方もおられる。今後は、地元の別の人材を見出し出演依頼していくなどして、出演者も内容もバラエティー豊かになると、地域文化の活性化によりつながっていくのではないだろうか。 また開催時期が他のイベントと重なる時期だったので、もっと幅広い集客を増やすためには、開催時期の考慮が必要かもしれない。 自己評価に記載されているとおり、今回の取り組みにおける効果の検証は本イベントに限らず必要なことであり、アンケートの質問内容も今後検討していただきたい。

		既成概念による施設選択から脱却し、アートを通して地域の文化施設を積極的に活用することで、アート活動の場の拡大と、文化芸術に触れる機会が少なかった層へとアプローチする。（具体的には前項までに記載しているので割愛。）	達成度：概ね達成	達成度： 概ね達成
			【成果】 プラネタリウムなど既存の施設の特性を生かしたコラボレーションにより、従来の枠組みにとらわれない斬新なアートイベントを身近な地域の中で楽しむ機会の創出につながった。 通常の施設の対象者以外の地域の人々がその場に足を運ぶきっかけをつくることができた。	【成果】 プラネタリウムをもつ児童文化センター・湊山公園を会場にしたのは、市民に愛されているという点でも知名度の点でもよかった。 「ここでしか聴けない（体験できない）」というプログラムやステージづくりは、今後も継続実施する必要がある。
			【課題】 親子連れ層の来場が多かった反面、幅広い層へ向けた企画も充実させる工夫が必要であった。 米子市のほか、境港市・大山町の小学校、幼稚園・保育園等へチラシの全校配布を行ったが、米子市外からの来場者は約24%に留まった。 周辺地域からも関心をもって来場いただけるような広報が、地区イベントだけではなくとりアート事業全体としても必要。	【課題】 広報について、今回に限ったことではないが、もっと広く周知できる方法を模索したい。内容の満足度が高いだけに、ホームページやSNS、新聞媒体など、有効と思われるメディア媒体での宣伝が来場者数にあまりつながっていないのがもったいなく感じる。小学校、保育園、幼稚園等で配布されたチラシが最も来場者数につながっていることから、幅広い層に向けた企画の充実とチラシ配布先の拡大を検討すると良いかもしれない。 またもっと米子市以外からの来場者を増やす工夫が必要である。
達成度集計(※５)			（１２／１８）≒６７％	（１２／１８）≒６７％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	６０％	６１．３％	６５．８％
観客満足度（%）（※６）	９０％	９６．８％	９６．７％
入場者数（名）（※７）	５００人	４６０人	３４４人

【自己評価総括】

○成果

実践したアーティストからも、普段の活動ではできない事（コラボレーション、テーマに沿った新しい試みなど）ができ、今後の活動の参考になったとの意見ももらい、会場の参加者の楽しんでいた様子（アンケートの満足度にも反映）とも照らし合わせても、必ず成功するという約束はできない（むしろ失敗をする可能性もある）不安は残るものの、アーティストにとっても鑑賞者にとっても、また、運営側にとっても既成概念に捕らわれない、チャレンジングな試みも含まれて、今後へのつながりに大変意義のある取り組みであったと思う。失敗を恐れないチャレンジにこそ「アート」のクオリティを上げる可能性もあると実感できるイベントとなった。

なお、実演芸術につながって行く第一歩であるところの実際のアートと触れる、鑑賞する機会が提供できたことは、この先実施者になるか、鑑賞者になるかのきっかけ作りになるような場所にもなった。

○課題

企画のとりかかりの遅さが会場決定、アーティスト選定、さらには広報の遅れにつながってしまう。また、会場に入場者の縛りがあると集客が困難。実際お断りする事態が発生することに。その対策も考えるべきであった。

○その他事業に関する意見、感想など

誰もがアーティストになるわけではなく、大事なことは興味、関心を持ちアートによってコミュニケーション能力や想像力を育むこと。そして、とりアートにかかわってきてずっと思い続けていることは、よき見巧者を育てること。良い観客がいることで企画する側のグレードが上がっていき、出演者のレベルアップにもつながっていくと思う。

【委員評価総括】

○成果

・アンケート回収率および観客満足度はそれぞれ 61.3%、96.8%と目標値を上回った。特に観客満足度は昨年度の96.7%とほぼ同じ数値であり、観客満足度を高レベルで維持した結果となった。実際に視察した際も、参加者の楽しそうな姿をたくさん確認することができた。

・普段から親子で足を運ぶ機会の多い場所でのアート体験が気軽にできた好機となった。普段と同じ場所なのに、大人も子どももめったにない充実したアート体験ができていたと思う。写生でなく五感を研ぎ澄ませ、自分の手で音を描いていく。すばらしい体験だったに違いない。

・会場の特性を存分に活かして体験と鑑賞がバランスよく企画されており、本事業の「いろんな『音』を見つけて、体験して、表現する『音』を楽しむ」というテーマが十分に感じられた。また、プラネタリウムステージは本会場ならではの企画であり、参加者からも好評だった。こういった企画は事業の独自性や観客満足度にもつながっていくと考えられる。

・地元のアーティストのみならず、アーティスト同志のコラボレーションによる相乗効果により、来場者も満足のできる内容のイベントとなった。数年前から実施されている“アートの融合”が今年もまた生み出された。昨年度の「キナルなんぶ」からのつながりも受けて今後継続してほしい方向である。これからも新しい取り組みに挑戦してほしい。

・取り組み目標、行動計画にあげてある企画のコンセプトが充分生かされていたと思う。コロナ禍で様々な制約があるのが残念としか言えない。参加者の年齢層も、幼い子どもとその親たちで、比較的若い層が中心だったことは喜ばしい。

○課題

・昨年度は「キナルなんぶ」は 344 人、一昨年度は 3054 人であるが、会場や社会状況も違うので、単純には比べられないが、今回の 460 人という入場者数は米子市での開催ということを考えると、少ないように思える。参加者を増やすためにどうしたらよいのか、今後の対策について具体的な記述が欲しかった。

・広報のことは昨年度の反省にもあったが、やはり今回も課題として挙がっている。市町村が違う上に諸事情も異なるという点もあるが、同じような反省を繰り返さないようにすることは大切ではないだろうか。

・せっかくの充実した内容の催しなので、もう少し早めに広報に力を入れて頂いたらよかったと感じた。その反面、参加者に限りがあるので、日数、回数を増やすことも考えていただきたい。

・コロナ禍でのイベントという現状は継続中なので仕方のない事だが、事前予約制という縛りで、当日入れない人もいたことなど、もう少し“当日枠”の検討がほしい。(プラネタリウム内でのわらべうたイベントの参加者は思ったより少なった。)

・会場内ロビー等で遊んでいる子供達（中学生も何名かいた）をイベントに巻き込んでも良かったのではと感じた。

・県西部の企画なので米子市在住者以外の集客をもっと考えるべきと感じた。

・当日のキャンセルの見極めと、当日の予約なしの入場について検討が必要。感染対策の徹底とのバランスが非常に難しいが、今後とも引き続き考えていかなければならない問題だと思う。

・入場者数は 460 人と昨年度の 344 人を上回ったものの、目標値である 500 人には届かなかった。

・わらべうたの自由参加型プログラムでは、12:30～14:30 の時間帯が昼食や子どもの午睡と重なったせいか参加者がなかなか集まらなかった。内容やスタッフの対応は大変良く、最終的に参加した子どもたちやその保護者はみな楽しそうな姿がみられたが、最初に会場に入った親子は他に誰もいないのを見て帰ってしまい、非常にもったいなかった。

・今回の取組目標に対してどのぐらい達成できたのかが現行のアンケートでは判断しにくい。アンケート項目についても、今後検討の余地がある。

○その他事業に関する意見、感想など

・今回、普段から興味をもっている“わらべうた”をどのようにアートとして浸透されるのかという課題をもって会場に足を運んだが、“ガチャ”という手段とは、とても驚いた。～子供達がとても楽しそうにガチャを回しミッションをクリアしていた～ なるほど、とても自然にわらべうたへの興味づけが成されていた。

・同じ会場での“えかきうた”の参加は、親子で無理なく参加できる良い方法だと思った。

・地元スタッフの皆さんも、ベテラン揃いのわらべうたを熟知しておられるメンバーばかりで、わらべうたに興味のなかった来場者へも充分にアピールしておられ、昔からある“わらべうた”の存在感を強く意識できた好機となった。

・わらべ歌とガチャのコーナーで、子どもたちが楽しそうに参加している様子を見ていたが、おそらく普段から児童文化センターを利用している人たちで、ちょっと違うイベント感で盛り上がっていた。

・プラネタリウムステージの演奏の後、すぐ退場せず残って楽器の回りに集まった、多くは子ども達だったが彼らが質問したり、それぞれの楽器の音を試したりしている様子がとても印象に残った。鑑賞と体験がつながっていることを実感した。

・参加者の参加回数について、アンケートでは「初めて」と回答した割合が 68.4%と圧倒的に高かった。アートに触れる門戸が広まったと見ることもできるが、ここからリピーターをどう増やせるかが大事になってくると思う。今後も良い企画をお願いしたい。

（5）第 13 回とっとり伝統芸能まつり

令和４年 12 月４日（日）倉吉未来中心

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくり	誰もが観覧しやすいよう、公演は入場無料としている。 出演団体を、子どもと大人で構成し、県内各地区の団体とすることで、県全域の幅広い世代から関心を持ってもらえるようにしている。	**達成度：一部達成** 【成果】 来場者アンケートでは、87.8%の方が「とても満足」または「満足」と回答し、特に満足した点として約20%が「料金」と回答しており、入場無料であることはある程度観覧の動機付けになっていると考えられる。 出演団体の選定に当たっては、できるだけ子どもや若い世代が属する団体を入れること、県内各地域の芸能のバランスを考慮して選定した。	**達成度：概ね達成** 【成果】 各地域の発表者は、大人から子どもまで幅広い年代で構成されており、それぞれが興味深い発表を行っていた。 入場無料であることで、気軽に観覧出来る印象を与えていた。アンケートにも「無料でうれしい」の声が聞かれた。
			【課題】 出演者の年代構成、地域に留意して演目を選定したが、来場者アンケートの結果では、来場者の年代は60代以上が約７割、地域は県中部が約７割と、「県全域の幅広い世代から関心を持ってもらえるようにする」という目標はあまり達成できなかった。	【課題】 偶然通りかかって鑑賞をした来場者はアンケートを見る限りは居らず、当日には入場無料は効果を発揮していなかったようである。また、アンケート結果からは、次世代を担う若年層の来場が少ないことが分かる。実際に、会場内には子どもの姿は少なかった。幅広い世代が関心を向けるような工夫がさらに必要である。 コロナ感染注意報が発令されて、来場数に影響があったと思う。伝統芸能（郷土芸能）に携わる人口減とコロナ感染状況が来場者数に影響している。 児童、青少年の育成も大切だが、次の世代に繋がっていないのが現状ではないだろうか。成年層、中高年層の育成が必要である。たとえば民踊団体の高齢化と衰退化は現実で、成年層、中高年層の育成、活動を盛り上げる取り組みを考えなければならない。
		広く県民への周知を図るため、様々な媒体を活用し、効果的な広報に努める。 ※チラシ・ポスター、新聞お知らせ欄、新聞折込チラシ・各自治体広報紙、地域の無料情報誌、ホームページ（伝統芸能まつり.アーカイブス）・ＳＮＳ等	**達成度：概ね達成** 【成果】 以下の様々な広報媒体を活用し開催の周知を行った。 ・チラシ・ポスターの配布（県内伝統芸能保存団体、文化施設、公民館、出演団体所属市町村小中学校	**達成度： 概ね達成** 【成果】 チラシ・ポスターの配布、県政広報、報道機関への資料提供、とりネットととっとり伝統芸能まつりＨＰへの掲載、文化政策課公式ツイッター・フェイスブックでの情報発信、無料情報誌

			等） ・県政広報（11/24 新聞掲載） ・報道機関への資料提供 ・とりネットＨＰ掲載 ・とっとり伝統芸能まつりＨＰ掲載 ・文化政策課公式ツイッター・フェイスブックでの情報発信。 ・無料情報誌（中部地区）「くらら」掲載 ・鳥取県文化振興財団発行の情報誌『Arte』に掲載 ・開催地域の日本海新聞購読者（28,540 世帯）へ新聞折込によるチラシ配布（11/27） 来場者アンケートによると、チラシにより情報を入手した方が約４割であり、例年どおり県内各所へのチラシ配架、新聞折込チラシが有効だったと思われる。	「くらら」と情報誌『Arte』への掲載、新聞折込など、様々な媒体を活用して広報が出来ていた。 特に、ポスターとチラシによる周知が有効であったことがアンケート結果から伺える。
			【課題】 今年度は、より多くの人を呼び込むため、まつり公演に合わせ未来中心アトリウムにて（公財）鳥取県文化振興財団主催のイベント「触れて聞いて体験！鳥取の郷土芸能特別展」を催すことで相乗効果を狙うコラボ企画の試みを行ったが、コロナの影響で出展者が直前まで決定できなかったこともあり、相互広報など有効な取組ができず、来場者増に結び付けることができなかった。	【課題】 入場を無料にしたり、開場前に幟を立てるなど、多くの方々に入場を促しているが、イベントとしての盛り上がりに欠けていた。今以上の広報活動を行い、多くの県民の方にこの素晴らしいイベントを知ってもらう必要がある。 広報は、当日本番だけの観客動員数ではなく、より広く伝統芸能を知ってもらうことを目的に行うべきだと思う。動画での広報があればよかったかもしれない。そのためには、伝統芸能をより広く発信する特別番組として、東中西のケーブルテレビ等で放映があればよいと思う。
「アート」が育む・「アート」を育む ～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実	出演者として多くの子どもたちに参加してもらい、日頃練習している成果を披露していただく。 ※コロナ予防の観点から、一昨年、昨年に引き続き高校生ボランティアによる運営参加は無しとした。	**達成度：達成**	**達成度：達成**
			【成果】 出演者 82 名のうち、10 代以下は 24 名と全体の約３割であり、多くの子ども達が参加し伝統芸能演技を披露した。	【成果】 各地域の団体は世代も幅広く、若い年代の出演者も多く見受けられた。 岩井地区伝統文化子ども教室実行委員会さんは、小学１年生から高校３年生までが定期的に練習をし、地域の伝統芸能がしっかりと次世代に受け継がれていた。 米子がいな太鼓保存会さんは、多くの子ども達が出演し、若いパワーを感じた。 子どもたちの練習成果を披露する場にもなっていて

				良かった。岩井湯かむり唄、万灯、太鼓など、アトリウムで、高校生の郷土芸能部が広報活動をしていて良かった。
「アート」で元気に～地域づくり～	①伝統行事・伝統芸能の継承 ②住民が、地域の「宝」に触れたり、良さを認識したりする機会の創出 ③地域の「宝」を守り、活用する取組	演目前に会場で流す地域紹介の映像により、伝統芸能が継承されている地域の魅力発信を行うとともに、地域と伝統芸能とのつながりを紹介し、その場所に行ってみたいと思える演出を行う。 地域伝統芸能の舞台を通じて、出演者、鑑賞者が地域の魅力を再発見するきっかけとする。 ※当日の観客アンケートにより把握する。 大人の公演を、次世代を担う子ども達が鑑賞・同じ舞台に立つ経験を通じて、伝統を継承することを学ぶ機会とする。	**達成度：概ね達成** 【成果】 来場者アンケート結果により評価する予定だったが、そのための設問をアンケートに入れ忘れていたため、結果を把握できず、一部評価不能となった。ただ、アンケートの自由意見では、「鳥取県の伝統芸能のすばらしさに感動する。」「鳥取の良さを見直す機会となった」などの記載も多く、地域の伝統芸能の魅力を感じていただけたと思う。 また、今回の公演では、小中学生を中心とした 10 代の子ども達が 24 名参加しており、他の伝統芸能に触れる機会を提供できた。10 代の出演者からは、「普段観られない鳥取の色々な伝統芸能が観れて良かった」「他の団体の芸能も観られてよかった」という感想があった。 なお、今回初めて実施した出演者アンケートでは、回答者全てが「出演して良かった」と回答しており、「保存会会員の励みにつながる」「伝統芸能を続けていく使命感を出演者同士で共有できた」の感想があり、伝統芸能を担う方々の継承への意欲の向上につながるものと考える。 【課題】 今回、コロナ禍のため、出演者には他団体出演者との接触を避けるようにお願いしたが、本来であれば、他団体との交流機会を設けることで子ども達の学びにつながると考える。今後の課題としたい。	**達成度：概ね達成** 【成果】 演目前に地域紹介の映像があることによって、各伝統芸能が地域で披露されている様子も垣間見ることが出来て、理解が深まる手助けとなった。 出演者アンケートでは「出演してよかった」という項目が 100%を達成し、出演者側の満足度の高さが伺えた。 「普段観られない鳥取県の色々な伝統芸能が観られて良かった。」などの感想も寄せられていて、20 代にも刺激になったようだ。 また、来場者アンケートでは「伝統芸能を守り、次世代が受け継ぐ姿勢に心うたれました。」などの記載があり、地域の魅力はステージから客席まで伝わっているようであった。 【課題】 舞台の進行について、時折不要な間があったことで、観客の集中を妨げているところが見受けられた。より良い舞台発表にするために、スムーズな団体の入れ替わり、紹介動画を流すタイミングなど、観客を飽きさせない演出が必要である。 また、発表団体の魅力を伝えるための、代表者の方から魅力あるコメントを引き出す工夫があれば、地域に伝わる伝統芸能の素晴らしさを、第三者の方にも伝えることができると考える。 音響について、倉吉未来中心という響きの良いホー

				ルでPAのボリュームが大きすぎた。もう少し素朴なお囃子の音が自然に聞こえてくる音響を考えなければならない。 コロナ禍のため、他団体との交流機会の場が無かったことが来年度の課題である。
		まつり終了後に、録画映像をYouTubeで配信し、会場で観覧できなかった方に広く視聴いただき、鳥取県各地域の伝統芸能を多くの方々に知ってもらい興味を持っていただく。	**達成度：達成** 【成果】 12/20から録画映像をYouTubeで配信し、いつでも誰もが鳥取の伝統芸能に触れられる機会を提供している。(配信開始12/20から1/12までの時点の総視聴回数は各動画再生回数合計1165回)	**達成度：達成** 【成果】 新型コロナの感染を心配されて来場を控えた方もいらっしゃるような時に、遠方からYouTubeなどで誰でも鑑賞できる画期的な方法を用いた。 録画映像は、YouTubeで確認することが出来た。視聴回数も順調に伸びているようで、多くの方々に知る機会を提供出来ている。
達成度集計(※５)			（１０／１４）≒７１％	（１２／１４）＝８６％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績※
アンケート回収率（%）	９０％	６９．６％	７０ ％
観客満足度（%）(※6)	９０％	８７．８％	８０．４ ％
入場者数（名）(※7)	５００人	２７０人	３５７ 人

【自己評価総括】

○成果

来場者数500人を目標としていたが、実績は270人であり昨年度より来場者が減る結果となり、多くの県民に観ていただくという目標は充分には達成できなかった。(R3：357人、R2：無観客、R元：585人）しかしながら、それを補完するものとして、会場に来られない方にも鳥取の伝統芸能を観ていただけるよう、YouTubeにより録画映像を配信することができた。

また、当事業は、多くの県民に地域の伝統芸能を観てもらい、伝統芸能の魅力や素晴らしさを共有し郷土に親しみと誇りを持つ契機としていただくという目的と同時に、伝統芸能の継承活動をされている方々に、当該公演に出演いただき演技を披露する機会を提供することで、活動への励みや次世代育成に繋げていただくことも大きな目的としているが、今回、出演者アンケートでは回答者全てが「出演して良かった」と回答しており、「多くの人の前で演技する機会は少ないが、今回観客から拍手をもらえて胸が熱くなった」「保存会会員の励みにつながる」「伝統芸能を続けていく使命感を出演者同士で共有できた」の感想があり、伝統芸能を担う方々の励みになったという点では成果があったと考える。

○課題

来場者数が過去最低の少なさだった。減少の要因としては、開催時期がコロナ感染第８波で感染者が増加しているタイミングと重なったことでの出控えや、開催地域の圏域人口が少ない等が考えられるが、その他にも、イベント自体の魅力という点でも今後も引き続き検討が必要と考える。

また、いままでは選定委員会で選定した団体の中で出演交渉をしていたが、コロナの影響により、練習が充分にできていない、団員が少ない等の理由により辞退される場合もあり、出演団体の選定に苦慮している。地域の特徴的な祭の紹介なども含め幅広い視点での地域の伝統や芸能の継承を多くの方に会場に足を運んでもらえるような工夫を検討したい。

○その他事業に関する意見、感想など

また、出演者のコロナ感染拡大防止のため、公演前々日に全員抗原検査を行う等の対策をとったが、検査陽性者が複数出れば開催中止もありうるこれまでにない厳しい状況だった。実際、コロナ感染リスクの懸念から急遽出演を辞退する団体があるなど、コロナ禍で3回目の開催だったが、コロナの影響は今年度が一番大きかった。

【委員評価総括】

〇成果

● 活動者の発表機会の充実

・普段は「祭り」という場で披露されている伝統芸能を、大きなホールで発表する機会は非常に貴重であり、伝統芸能従事者の皆さんの励みになった。

・倉吉未来中心という素晴らしいホールで、若い方から年配の方まで、幅広い年齢層の出演者により、各地域に伝わる伝統芸能の活動が披露されていた。また、会場には多くの幟が立つなど、このイベントを盛り上げるための工夫も施されていた。各団体の実演の前には、動画でわかりやすく各地域を紹介するなど、発表前に観客にわかりやすい情報が伝えられていた。

● 地元県民・次世代への継承

・来場者にとっては、遠方で見に行くことがなかなか出来ない地域の伝統芸能を生で見て、その良さを体感出来る楽しい企画となっている。出演者の思いをステージ上のインタビューで直接知り得ることが出来ることも、地域の伝統芸能の魅力を伝えることに一役買っている。

・このような発表の場が設けられることで、各地域のみなさんが伝統芸能を守るモチベーションの向上にもつながり、地域を大切にするといった郷土愛も育むことができる素晴らしいイベントであった。

・Youtube で配信。広く広報をすることを目的に収録制作ができた。

〇課題

● 来場者数・認知度向上に向けた取り組み

・各団体の発表には力が入っており非常に優れていた。今後は、来場者数をいかにして増やして行くかが課題。コロナ禍では難しくもあるが、伝統芸能と現代的なアートとのコラボレーションなど、新しい試みがあると若年層の興味をひくのではないか。

・意義深いイベントであったが、集客が少なかったのが残念であった。集客を上げるためには、参加団体を増やすことで、出演する関係者の来場を促すことができるのではないだろうか。また、SNS はもちろんのこと、新聞、テレビなどで毎年行われているこの素晴らしいイベントの意義や活動を多くの県民に知っていただくことが大事である。イベントの大きさに比べると、イベントの認知度が低いので、さまざまな媒体を使って認知度を上げ、３年連続で 500 人以上などの具体的な目標を持つべきである。

・収録をしてしまえば、いろんな場面で発信できる。Youtube での発信は、予算 0 円でできるので活用すべきである。収録制作には費用がかかるが、その費用対効果は YouTube だけで終わらせるのはもったいない。箱ものだけの演出、企画に止まらず、伝統芸能（とっとり伝統芸能まつり）をより広く発信するための番組として東中西のケーブルテレビとかで特番があればよいと思う。ダイジェスト版を制作し広報用に活用してはどうか。

・YouTube もダイジェスト版があってもいいのでは。

● 成年層をはじめとする担い手・継承者育成に向けて

・プロローグおよび幕間は、高校生が担うといいのかも。

・児童、青少年の育成も大切だが、次に繋がっていないのが現状では。成年層、中高年層の育成が必要では。たとえば民踊団体の高齢化と衰退化は現実で、成年層、中高年層の育成、活動を盛り上げる取り組みが必要ではないだろうか。

〇その他事業に関する意見、感想など

● 個別の演目について

・米子がいな万灯は、「がいな祭り」の中で何度か拝見した。その時は、舗道から連の方の間近で万灯を見上げる臨場感、高揚感がお祭りムードを高めていた記憶がある。今回は、ステージ上で掲げられた万灯を客観的に見ることが出来たが、その高さの全体像を客席からはとても把握しやすくて圧倒された。「見せ方」が変わると面白さも変わる驚きがあった。
和太鼓とのコラボレーションは、フィナーレにふさわしい賑やかさを演出できていて、楽しませて頂いた。

・獅子の見得が格好良かった。一角ではなく獅子舞で神楽獅子を二頭舞でどう合わせて舞うのか興味深かった。見事に素晴らしい舞であった。太鼓がまた素晴らしい。

・宇野三ツ星盆踊り　生歌が良かった。三味線が生で、はやしても育っていくことが望ましい。衣装が華やかでよかった。男踊り、女踊りがあって素晴らしかった。途中から太鼓が三人打ちになり、年配の方の所作が素晴らしかった。上手く伝承し盛り上げていけば「風の盆」に負けないくらいの良いものになるのではないだろうか。

・幕間が参加型で良かった。リーダーが車いすで頑張られていて、良い意味、元気をもらう演出効果になっていた。

・岩井ゆかむり唄、岩井音頭　子どもたちの浴衣姿が可愛いに、さらに幼い子が外れることなく踊っていて大人が控えめで、子どもたちを前に出しての演出で良かった。隊形変化があっても良かったのではないだろうか。生演奏で伝承できれば良い。湯どころらしい可愛い踊りでした。

・三朝小唄踊り　芸子さんの踊りは素晴らしかった。温泉情緒を舞台に遺すことができて良かった。

・太鼓と万灯の競演　中部地区、東部地区にはないパフォーマンスとリズムで刺激があって良かった。

・演出で祭りの動画を演目中に流したら祭りの雰囲気が上がったのではないだろうか。

● 公演全体の演出・運営について

・アンケートにも多くの声が寄せられていたように、司会者のトークが分かりやすく好感を持てた。

・イベントの演出については、もう少し観客が飽きないような工夫が求められる。見せ方や聞かせ方など、まだまだ改善の余地がある。司会者についても、鳥取の伝統芸能という点を考えると、時に鳥取出身の司会者に任せるのも良いかもしれない。伝統芸能の定義などを考えると出演する方も限られるかもしれないが、より多くの方に来場いただけるような工夫が何より大事である。

（６）第 66 回鳥取県美術展覧会

令和４年９月 17 日(水)～12 月７日(水)県立博物館ほか

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	日頃、文化芸術を鑑賞していない、活動をしていない人も文化芸術を気軽に楽しめる機会の提供	これまでチラシ、ポスター、新聞など紙面での広報が中心であったところ、本年度は新たに YouTube(インストリーム広告）を使用した展覧会の告知を行う。また、各種 SNS(LINE、Twitter、Facebook）を活用しインターネット上での広報を通じ、特に県展への来場が少ない 30 代以下の県民の興味・関心を引き出し、アート作品の創作や鑑賞を身近に感じてもらう。 【目標数値】（観客ｱﾝｹｰﾄ） 30 代以下の来場者割合：13.3% （第 65 回実績 10.3%） 昨年度のアンケートでは、「あなたが好きな作品賞」の投票用紙がアンケートの裏側にあり、投票に気づかなかったという意見があった。 本年度は投票用紙を表面に変更するとともに、受付での投票の呼びかけを行い、より多くの鑑賞者にそれぞれの作品の良い点、好きな点などを考えながら楽しく主体的に鑑賞してもらうことで、アート作品への興味・関心を高める機会とする。 【目標値】（あなたが好きな作品賞投票率） 投票率：45% （第 65 回実績：42%）	**達成度：達成** 【成果】 SNS をきっかけとした来場者の割合は 2.2%（昨年度 1.8%）となった。また、ホームページも合わせたインターネット上での広報による割合は合計で 7.5%となり、昨年度に対して 1.8%増加し、30 代以下の来場者割合は 21.0%(※)となった。 鑑賞者投票の投票率は 54.8%となり目標を達成した。 ※年代に係る実績数値（21%）は、当初、観客アンケートでの集計としていたが、アンケートに協力くださる方の年齢に偏りが生じている可能性があるため、より来場者全体の実態を把握するべく会場受付で行った測定（受付を通過したすべての来場者の見た目年齢を記録）結果とした。 ◆<u>同じ測定方法による R3 実績値：17.5%</u>	**達成度：達成** 【成果】 ・30 歳代以下の来場者割合は目標数値を達成した。 ・SNS や HP などインターネット上での広報をきっかけとした参加者は増えており、特に 30 歳代以下の参加者割合の増加にも効果があったと思われる。 ・「あなたが好きな作品賞」投票率も目標数値を達成した。 ・投票用紙をアンケートの表面に変更したこともわかりやすくなった。 ・受付の方がアンケートの記入を呼びかけられていたのも効果があったと思う。 ・「あなたが好きな作品賞」は鑑賞者が主体的に鑑賞することにより、興味・関心を高めることにつながる。
	誰もが文化芸術に親しむことができるようにするための環境づくり	鳥取会場での展示ののち、米子、日南、倉吉の３会場で作品の巡回展示を行うとともに、本年度は、今年７月に市の文化・芸術の拠点として開館した境港市民交流センターにおいて選抜展を実施する。無鑑査作家等の優れた作品や、地域で創作活動に励み入選を果たした市民を広く紹介することで、美術、芸術文化に対する関心を高め、地域の美術、文化芸術の振興を図る。 【目標値】（来場者数（境港会場）） 1,000 人	**達成度：概ね達成** 【成果】 境港会場の来場者数は、目標に対して▲200 人の 800 人となり目標値に届かなかった一方、鳥取、米子、日南、倉吉会場の合計者数は昨年度に対し＋158 人（8,665 人）となった。 これまで県立博物館ロビーで行ってきた表彰式を、密を避けるため講堂での実施に変更し、さらに作品搬入時に来場者同士が密集・交差しないよう動線計画を改善するなど昨年に加えてさらなる感染防止対策を行い、安	**達成度：概ね達成** 【成果】 ・境港会場で目標を下回ったが、境港は初めの開催であり、今後継続して開催することにより、地元に馴染み、今後増えることが期待できる。 ・会場内の感染対策は、受付職員、展覧会場内の監視員の対応により、安全に開催された。 ・表彰式をロビーでできれば、多くの来場者にも立ち会ってもらえてにぎやかに開催できるが、コロナ禍であり、講堂で開催

		昨年に引き続き、展覧会期間中、検温・手指消毒・マスク着用といった基本的な感染対策を会場での注意事項の掲示や、受付職員の案内等により徹底する。また、例年、県立博物館玄関ホールで実施していた表彰式について、講堂へ会場を変更し、他の来館者と接触・密集しない環境を確保する。また、会場への入場人数を制限し、全席指定で実施することで参加者同士のフィジカルディスタンスを保つ。	全・安心な事業を実施できた。	されたことは、適切であった。 ・作品搬入時の動線を改善するなど、感染防止対策にも努めた。 ・審査員の講評が、各部門の展示会場に掲示されており、作品と併せて鑑賞することで、わかりやすかった。
			【課題】 ８月以降、県内の新型コロナウイルス感染者数が急拡大したことを受け、ギャラリートークを全会場で中止とした。次年度以降も感染収束が見えない中であるので、感染対策を行いながら鑑賞者がより作品を楽しみ、身近に感じられるような取り組みを考える必要がある。	【課題】 ・すべての作品に、作者の意図がわかるようコメントが欲しかった。 ・ギャラリートークの中止が残念という声がたくさんあった。ウイズコロナという中で、それに代わる取組みを工夫してほしい。 ・倉吉会場に対する苦情が結構あった。又、来場者数が減少した倉吉は、県立美術館建設地である事から、更なる鑑賞者の掘り起こしが必要である。
「アート」が育む・「アート」を育む ～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	学生からの出品について、これまで特に高校生は県高校総合文化祭の出品時期に県展が開催されることから、県展に出品することが難しいという状況があった。本年度、学生を対象とするコンクール等へ出品したことのある作品についても、県展へ出品できるよう出品規定の改定を行い、県展が広く多世代にわたる創作活動の場となるよう取り組む。 【目標数値】 学生以下の出品数：40 点 （第 65 回実績:29 点） 「あなたが好きな」作品賞の表彰式をジュニア県展表彰式と合同で開催し（令和 4 年 12 月中旬予定）、当日、受賞作品の紹介パネルの設置等を行う。県内の優れた作家と出会い、作品を紹介する機会を設けることにより、子どもたちがアートの楽しさや奥深さをより身近に感じられる機会を創出する。（R1 より継続実施）	**達成度：一部達成**	**達成度：一部達成**
			【成果】 学生以下の出品数は昨年度からは 5 点の増加となったが、目標に対し▲6 点の 34 点となり、目標数値には至らなかった。 また、デザイン部門では県展へ初出品した高校生 2 名が県展賞を受賞するなど、幅広い世代の優れた芸術活動をたたえる機会の創出につながった。 あなたが好きな作品賞の表彰式は悪天候により中止とした。	【成果】 出品規定を改定されたことは、学生以下の出品数が目標数値には届かなかったものの、わずかでも増となっており、評価できる。
			【課題】 これまで県展のキャプションにおいて、学生の作品とわかる表示は行っておらず、若い世代の活躍があっても鑑賞者に伝えることが出来ていなかった。次年度以降、学生の作品は来場者にわかるよう明示を行い、同世代の子どもたちにアートへの興味や親しみを持ってもらえるきっかけとする。	【課題】 学生の作品と解るよう明示し、若い世代に親しみを持ってもらえる工夫を。
達成度集計(※５)			（６／９）≒６６％	（６／９）≒６６％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	４５％	５３．９％	４２％
観客満足度（%）（※６）	９７％	８１．１％	９５．２％
入場者数（名）（※７）	１０，０００人	９，４６５人	８，５０７人

【自己評価総括】

○成果

・定量目標としているアンケート回収率、観客満足度、入場者数の３項目のうち達成した項目はアンケート回収率のみであった。（ただし、観客満足度については、無回答を除いた回答者（4,239 人）の満足度は 97.6%であった）

・本年度は県展に係る広報業務について、プロポーザル型入札（業務受託希望事業者より、業務内容の提案を受け、価格と提案内容を審査して事業者を選定するもの）による受託事業者選定を行った。専門性のある事業者と県展の広報を行うことにより、昨年度にはなかったメディアでの広報活動（YouTube でのインストリーム広告、日本海ケーブルテレビでのテロップ広告、フリーペーパー（うさぎの耳・西部版）での記事広告）を実施することができ、幅広い世代の来場につながった。特に 10 月・11 月の 2 ケ月間にわたって実施した YouTube のインストリーム広告では、15 万回の広告を表示した。広告内容について、入賞作品の画像を多用し、視聴者の興味を引く内容としたことにより、当初の想定（4 万 6 千件）を上回る約 6 万 6 千件がスキップすることなく視聴され、多くの県民に広く展覧会を認知してもらうことが出来た。

・来場者について、鳥取、米子、日南、倉吉の 4 会場のうち、鳥取会場では会期中の祝日に、台風が襲来したことにより昨年度に対して大幅に人数が減少し（▲253 人）、来場者数の大幅増にはつながらなかった。一方で、境港会場では来場者のうち 36.5%が 70 歳以上となり、米子会場の 39.2%に次いで多かった。アンケートでは、米子会場までは移動が難しく、自宅の近隣で開催されたことをきっかけに鑑賞に訪れたという意見も多数あり、地域の文化・芸術に対する興味・関心を高めるだけでなく、実際に参加してもらうきっかけとなった。

・学生以下からの出品数は 4 年ぶりに昨年対比で増加した。また、今回の県展では、初出品と答えた出品者(79 名)のうち、もっとも多い年代が 10 代（21 名）となった。

○課題

・新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、本年度は全会場でのギャラリートークの開催を中止した。アンケートでは、作品の解説を聞きたい、受賞作品の選定理由を知りたいという声も多くあり、次年度以降、鑑賞者に美術作品をより深く知り、楽しんでもらえる方法について、コロナ流行下の中でも実施できる取り組みを検討したい。

・本年度初めて実施した出品者の年代調査（出品申込書に年代を記入する項目を追加（任意回答））によると、一般出品者に占める各年代の割合は、10 代 5.8%、20 代 4.2%、30 代 2.8%、40 代 4.7%、50 代 8.8%、60 代 23%、70 代以上 35.6%であり、鑑賞者と同じく若い世代の参加が少ない。一方で、県展では毎年 10 代、20 代の学生も多数入賞している。こうした若手の活躍を鑑賞者に広く伝えることで、同世代の県民に出品や鑑賞に興味を持ってもらえるきっかけとしたい。

・アンケートでは特に高齢の来場者より、休憩用のいすの増設、掲示物の文字の大きさを大きくしてほしいなどの意見が多数あった。誰にでも鑑賞しやすい環境となるよう、改善を行いたい。

○その他事業に関する意見、感想など

・今後の県展で行ってほしい取り組み等をアンケートしたところ（問８）、現状のままでよいとする声もある一方、ワークショップの開催、出品者に関する情報やより多くの作品講評の掲示、新しいジャンル（映像など）の作品を観たいなど、芸術に対してより幅広く・深く知りたい、体験したいという意欲的な意見があった。こうした意見すべてを県展という事業の中のみで実施することは難しいが、創作発表や鑑賞、アートに親しむ場として県民に求められる内容は時代とともに変化しているため、広く意見を聴取しながら、今後の県展の内容について検討したい。

【委員評価総括】

○成果

・30 歳代以下の来場者割合と、あなたが好きな作品賞投票率は目標数値を達成した。

・広報業務を専門性の高い業者の提案を取り入れて実施したことにより、多様な広報活動が実施でき、県民への周知に効果があった。

・メディアでの広報活動は効果がある。テレビやフリーペーパーは幅広い年齢層に有効である。また、SNS や HP などインターネット上での広報をきっかけとした参加者も増えており、特に 30 歳代以下の参加者割合の増加にも有効であったと思われる。

・「あなたが好きな作品賞」の投票用紙をアンケートの表面に変更したこと、受付の方がアンケートの記入を呼びかけられていたことは、投票率のアップに効果があったと思う。

・「あなたが好きな作品賞」は鑑賞者が主体的に鑑賞することになり、興味・関心を高めることにつながる。

・感染防止対策は、搬入作業、表彰式、展覧会会期中全体通して取られており、安全に開催された。

・審査員講評が、各部門の展示会場に掲架されていたので、作品と併せて見ることでわかりやすかった。

・展示会場に境港会場を増やしたことは、今年度入場者数が目標数値を下回ったとはいえ、アートに親しむ県展の在り方としてよい。

○課題

・すべての作品に、作者の意図をコメントで添えてほしい。

・ギャラリートークの中止が残念という声がたくさんあった。感染が急拡大したことから、中止の判断は致し方ないと思うが、今後はウイズコロナということで、それに代わるもの（例えば、作品に対する講評を YouTube で配信するなど）を工夫してほしい。

・倉吉会場の観賞する環境について、アンケート結果等でも課題の声が比較的多く見られた。照明の具合や、作品の展示配置（高低）、休憩用の椅子の設置等、来館者の鑑賞に配慮した更なる改善と工夫が求められる。

・若い世代の入賞作品を広報に活用することで、学生以下の出品数や、若者の入場者数の増につなげたい。

・アンケートでも複数の方が言及されていたが、特に書道で、展示数が部屋の大きさに比べて多すぎるので、観賞するには居心地が悪かった。特に部屋の隅の作品は、近くに人がいるととても見にくかった。無鑑査作品数も含めて展示数を検討してほしい。

・無鑑査作品の多さに対する厳しい意見がアンケートで多数見られた。昨年度の報告書にも同様の意見が出されていたことから、何らかの対応策が求められる。
・「アートピアとっとりの YouTube チャンネル登録者数」の増加に向けてできること。
〇その他事業に関する意見、感想など
・アンケート結果を見ると、それぞれの方の思いが真反対な意見が多くみられ、判断が中々難しい。休憩用の椅子の要望が多くあったが、作品数が多いので、会場によっては、展示室内に椅子を設置することは難しいと思われる。
・作品の数、展示方法、キャプションの文字の大きさなど、改善を求める声が結構あったことは、今後検討する必要がある。
・審査会において出品された作品の題名を読み上げるのではなく審査時に作品と一緒に提示すべき。題名は作品の一部である為ご検討いただきたい。

（7）第４回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会

令和４年 11 月 13 日(日)県民ふれあい会館

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	日頃、文化芸術を鑑賞していない、活動をしていない人も文化芸術を気軽に楽しめる機会の提供	これまで作品募集時のみチラシを作成・配布していたが、本年度は新たに本選大会に向けたチラシを作成･配布するほか､県立図書館と連携し、大会前に短歌の作り方や大会審査員の著書を集めた特設コーナーを設置する。 大会チラシに、地元の漫画家によるイラストを採用しているところだが、本年度は前回大会の決勝作品をイメージした本大会オリジナルのイラストを使用し、短歌作品を身近に感じてもらえるよう工夫する。 後日､大会の動画(ダイジェスト･全編)を YouTube に掲載し、当日会場に来られなかった方にも手軽に大会を楽しんでいただく。	**達成度：概ね達成** 【成果】 県歌人会主催の県民短歌大会で配布したチラシや県立図書館１階の階段下の目立つ位置での展示で開催を知って来場された方もあった。 【課題】 チラシの作成・配布に加え、県歌人会はじめ文芸関係者や高校の国語科教員への周知など行ったが、十分な集客には結びつかなかったため、企画段階からより多くの方に興味を持っていただける内容を検討する必要がある。	**達成度：概ね達成** 【成果】 行動計画に対し、作品募集・本選大会に向けてのチラシ作成･配布など、短歌を身近に感じてもらう為の工夫があった。 また、県立図書館に大会の特設コーナーを設置し、より多くの人に PR する工夫もあった。 【課題】 当日の集客・参加校数から鑑みると、更に多くの人々に親しんでもらう為の取組を期待したい。 チラシの配布を少なくとも県内全高校生に配布してほしい。一部の拠点となる高校だけでは形だけの事業達成と見えてしまう。「万葉の郷」と銘打つのであれば更なる周知の努力を期待する。 本選用・募集用のチラシの区別が分かりにくい。観客を増やす為にも「観戦可」「無料」などの文字等の工夫が必要。 YouTube への投稿が遅い。11 月の事業実施に対して投稿が 2/1（2023）では全く意味がない。第 3 回大会も第 2 回大会も実施から数ヶ月経てからでは次につながらない。更なる検討を期待する。
「アート」が育む・「アート」を育む～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	参加チーム募集に際しては、県内外の高校に広く参加を呼びかける。県内は県教育委員会高等学校課にも協力を依頼し、国語科の教員に国語の授業等での取組を働きかける。また、7 月に開催される高校生文芸道場鳥取県大会（鳥取県高等学校文化連盟文芸専門部主催する、県内の文芸部が集まる大会）で参加者が短歌創作に取り組むことから、大会の周知を行い、文芸部の生徒に参加を呼び掛ける。県外は　高総文祭や他の文芸分野の大会に参加実績がある学校を中心にチラシの送付等により周知を図る。	**達成度：一部達成** 【成果】 応募数は 117 チーム、16 校と、前回を下回った。一方、前回から引き続いて８校から応募があるなど、大会が定着していることもうかがえた。 【課題】 第３回以降応募数が減少しており、３人１組のチーム編成が必要であること、文芸部が普段取り組んでいないパフォ―マンスによる発表が評価対象であること、開催時期などが応募のハードルを高くしていると思われる。	**達成度：一部達成** 【成果】 応募総数は減っているが、県外高校で、昨年に続き応募参加している高校もあり大会の定着はうかがえる。 【課題】 応募チーム数、応募学校数ともに前回（170 チーム、18 校）を下回り、定量目標を達成できなかった。 短歌を詠むことに加え３人１組のパフォーマンスの発表となると指導者の力量も必要となる。まずは応募総数増加に向けて県内高校

		【目標数値】 応募チーム数、応募学校数が前回（170 チーム、18 校）を上回ること。		（例えば１年生時とか）の授業で必ず短歌を詠む事をカリキュラムに掲げるよう県教育委員会へ働きかけてはどうか。 　また、３人１組のチーム戦を主に、別枠で新たに「短歌大賞」のように１つの題に対して１首を応募する枠を設定すれば、応募総数とりわけ県内高校の多くの参加も見込める。 　十代の今しか詠めない一首を期待する。
	子どもたちの地域の歴史や文化資源への理解促進	３年ぶりの参集開催となることから、初めての取組として、大会前日に大会参加者（希望者のみ）を対象にエキスカーションを実施し、因幡万葉歴史館や周辺の万葉集ゆかりの地（ガイド付き）や鳥取砂丘を案内する。	**達成度：達成** 【成果】 　県外チーム４チームのうち、３チーム９人がエキスカーションに参加し、天候にも恵まれ、楽しんでいただけた。 　特に、因幡万葉歴史館では館長の説明に熱心に耳を傾ける姿が見られるなど万葉の郷への理解を深める良い機会となった。 　また、エキスカーションを通して参加者同士の交流も図られ、大会当日の盛り上がりにも繋がった。	**達成度：達成** 【成果】 　大会前日のエキスカーションの実施は県内外の高校生に鳥取を知っていただくよい機会となった。
「アート」で元気に～地域づくり～	住民が、地域の「宝」に触れたり、良さを認識したりする機会の創出	本大会を通して、鳥取県が大伴家持、山上憶良ゆかりの地であることを広く知っていただくきっかけとする。大会ホームページ内に県内の万葉故地の紹介ページへのリンクを貼る、知事挨拶の内容を掲載するなどの工夫により、鳥取県と万葉集とのつながりや「万葉の郷とっとりけん」を PR する。 　10 月 15 日に全国の家持ゆかりの地をつないで開催されている「令和の万葉大茶会」が鳥取市で開催され、因幡万葉歴史館では企画展「家持と憶良」が開催中であることから、参加者へのチラシ配布を相互に行うなど、連携したPRを展開する。	**達成度：達成** 【成果】 　当日、ＮＨＫ鳥取放送局の取材があり、大会の模様が鳥取県、中国地方のニュースの他、全国ニュースでも２回放映され、県内外に鳥取県が万葉集ゆかりの地であることや大会をＰＲできた。 　また、万葉衣装によるパフォーマンスは、当時に思いをはせることができたという参加者のコメントもあるなど、好評であった。	**達成度：概ね達成** 【成果】 　NHK の全国ニュースでの放映の影響は大きい。 　また、相乗効果が期待される「令和の万葉大茶会」や因幡万葉歴史館での企画展「家持と憶良」などと連携した PR を展開することができた。 【課題】 　大会ホームページ内に県内の万葉故地の紹介ページへのリンクを貼るという計画は達成されなかった。 　中部地区（倉吉）で 10 年以上の活動がある「山上憶良短歌賞」の実施団体と連携するなど、鳥取市周辺に加えて県内全域を巻き込んでいく事も大切である。
達成度集計（※５）			（９／１２）≒７５％	（８／１２）≒６７％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	７５%	４４．３%	８７%
観客満足度（%）（※６）	８５%	９２．８%	８５%
入場者数（名）（※７）	１００人	４５人	１５人

【自己評価総括】

○成果

・新型コロナの影響により、過去２回の大会は県外チームはオンライン参加だったが、今回、３年ぶりに現地に参集して開催することができた。過去２回オンラインで参加し、今年は３年生となり受験勉強等もある中、本選大会に出場いただいた生徒さんもあり、審査員のコメントや会場アンケートでも「リアルでやり取りができ、パフォーマンスが見られてよかった」という意見が複数あった。

・パフォーマンスで発表するということが定着しつつあり、特に県外チームは力の入ったパフォーマンスを披露してくれた。ＮＨＫ鳥取放送局が取材に来られ、当日昼の中国地方のニュースのほか、当日１５時、翌朝７時前の全国ニュースでも、パフォーマンスの様子や生徒のインタビューが詳しく放映され、県内外に鳥取県が万葉集ゆかりの地であることや本大会をＰＲできた。

・来場された方からは、高校生の短歌作品やパフォ―マンス、審査員コメント等について高い評価が得られた。

○課題

・ステージ上でのチーム入れ替えや審査員とのやり取り、講評に想定していたより時間がかかり、予定終了時間を大幅に超過してしまった。時間内で収めるには、チーム数、対戦方法を含めた見直しが必要。

・集客に向けていろいろと働きかけ、前年度より増加はしたが、当日の観客は目標の半分程度だった。また、県内の各高校はもちろん、出場チームを輩出した鳥取東高２年生にチラシを配布し、先生からも声をかけていただいたが、大会の観戦に来場された高校生はいなかった。近年、短歌への注目度が高まっていることも利用し、より集客力を高めるには、企画段階からの再検討が必要。

・本事業は、元号が万葉集を典拠とする「令和」になったことをきっかけとして、本県を万葉集ゆかりの地としてＰＲし、地域活性化につなげる趣旨で始まった事業であるが、次年度で５年目の節目を迎えることから、今後の方向性について検討すべき時期にある。

○その他事業に関する意見、感想など

・県外チームは文芸部に所属し、普段から文芸作品の制作・発表、全国規模の短歌大会や俳句甲子園への出場に積極的に取り組んでいる生徒が主に応募してくるのに対し、県内では文芸部での文芸活動は非常に少なく、国語の授業で短歌を制作し、応募いただいていることから、作品は優れていても、パフォ―マンスや審査員との質疑への対応に限界があるのが現状である。回を重ねるにつれてパフォーマンスや質疑の全体的なレベルが上がり、また、今回リアル対戦となったことで、県外の高校生に喜んでもらえた一方、県外チームと県内チームの取組の違いがより明確になり、県内の高校生には負担感があったことを懸念する。

【委員評価総括】

○成果

・コロナ禍でのイベント開催に関する評価としては、県外チームを含めた 3 年ぶりのライブ開催となり、観客満足度も定量目標を達成し高い評価を得られるなど、参加校は元より、県民が気軽に楽しめる機会の提供となった。

・大会運営に関する評価としては、スコアがスクリーンに映しだされるなど観客にも結果がわかりやすく工夫されていた。又、万葉衣装を着たパフォーマンスも短歌の世界観を惹きたて、見た目にも華やかだった。

・大会の意義、発展に関する評価としては、参加常連校もあり徐々に定着しつつある大会と言える。初めて行われたエキスカーションを通して、万葉の郷鳥取県への理解も深まり、参加者同士の交流も図られた。万葉集や短歌といった伝統文化にも親しむ機会の創出につなげることができた。トーナメントによるチーム対戦方式やパフォーマンスによる発表を取り入れて、他の短歌大会との差別化を図る取り組みが関心を呼びつつあり、NHK の全国ニュースでパフォーマンスの様子や生徒のインタビューも放映される事で、鳥取県が万葉集ゆかりの地であり、本大会の PR になった。

・今しか詠めない 10 代の高校生だからこその言葉の選び方や表現がとても魅力的な大会であり、著名な審査員の先生方のコメントも素晴らしい。「万葉の郷」と称する鳥取県ならば生涯一度でもかまわないので県内すべての高校生に 31 音の短歌を授業内でもかまわないので読むことに挑戦してほしい。

○課題

● 広告・集客に関する課題

とても内容が充実している大会であるのに来場者が定量目標を下回る 45 人と少なかった。大いにメディアを使用しての宣伝・募集も大切。又、大会の存在を認知していない県内高校生も多数あることから、例えば全県下の高校生すべてにチラシを配布するなど大会の情報が県内高校生に広くいきわたるよう工夫をすべきである。又、山上憶良ゆかりの中部地区からの参加がない事も残念であり、鳥取市周辺に加えて県内全域を巻き込んでいく事も大切である。

● 運営面の課題

応募チーム数、応募学校数ともに前回（170 チーム、18 校）を下回り、アンケートの回収率とともに定量目標を達成できなかった。参加校の減少については、従来通りの 1 チーム 3 人で戦う枠に加えて 1 題 1 首で競う「短歌大賞」（仮）の枠を設定すれば参加人数も参加校も増えると思う。又、全国各地の「万葉の郷」を称する地域への PR も参加校及び集客に繋がるように思う。

● 司会・マネジメント

今回のイベントの時間超過は仕方ないとはいえ、司会者がプロでなかった事が大きいかと推察する。スムースな進

行に向けてプロの力を借りることも検討してはどうか。
※応募総数や集客の増加に繋がる、今イベントの YouTube への投稿は、大変遅く、数ヶ月経てからであった。なるべくイベント終了後早い時期での投稿が望まれる。又、イベントすべてを収録・編集されている YouTube 投稿は 2 時間と長く、応募チームにとっては参考になるかとは思うが、周知を促す為には気軽にイベントの内容を知ることができるダイジェスト版が視聴しやすいと思われる。イベント終了後の早い段階での YouTube 投稿としてダイジェスト版を検討いただくのはどうだろうか。
○その他事業に関する意見、感想など
　大会を通して短歌の面白さを再確認でき、審査員の講評も素晴らしく、大変興味深かった。より多くの高校に取り組みが広がっていく事を期待する。
　前回、今回と、知事のあいさつは素晴らしく、イベントに対する思いを感じた。とても意義のある魅力あるイベントであり、更に盛り上げる為に何が必要で何を変えていけばよいのか恐れずに進めていただきたい。鳥取県が誇れるイベントの一つになると確認している。
　大会の YouTube 投稿が遅い。当日会場に来られなかった人々にも手軽に大会を楽しんでもらう為にも鮮度が必要である。又、授業内でも動画を視聴できるよう、30～40 分に編集されていると良いように思う。
※「短い言葉で少し余白を持って心情を伝える短歌は、若い時代特有のモヤモヤした感情を表現するのに適しており、人々にもそうした歌が心に刺さる」ある歌人の言葉です。次回は県内すべての高校生の作品が応募される事を願っています。
※全国の若者の間で短歌ブームがきている。コロナ禍の不安で多くの人が内面を見つめるようになった事も背景に。＃tanka でツイッターなどで投稿を共有してもらえるという。時代の流れに添ったイベントの継続を期待する。

（８）第 35 回県民による第九米子公演

令和４年 11 月 27 日(日)米子市公会堂

【文化芸術事業評価シート】

目的	自己評価			評価委員による評価
	取組目標	行動計画	達成度及び評価理由	達成度及び評価委員からのコメント
「アート」に親しむ～環境づくり～	文化芸術活動者の発表や創造の機会の提供	ベートーベン作曲の交響曲第九番を３０年以上にわたって公演しており、県民に広く定着しているこの事業をさらに発展させる。 コロナ禍において公演を３年間行っておらず、特に今回は練習の段階から新型コロナ感染症対策を行い、公演ができるように努めてきた。 また、演奏者は感染症対策も含め、演奏者数を制限し募集を行い、例年より少ない人数で取り組むが、人数が少ない分、指揮者が要求する細かな表現に対応し、新しい第九をお届けしたい。	**達成度：達成**	**達成度：概ね達成**
			【成果】 練習時には感染症対策として、本公演の参加者数を制限し、練習時にはマスクの着用（合唱用）と、使用品の消毒、指導者の前にシールドを置き感染症対策を行い、参加者は健康観察等を行い、感染を起こすことなく、ほぼ計画通りに練習を行い本番に臨むことができた。 指揮者が要求する怒鳴らないきれいな合唱を心がけ、繊細な表現に近づけたと思う。	【成果】 新型コロナ感染症の感染が拡大する中で、感染症対策に気をつけながらほぼ計画通りに練習を行い、本番を行うことができた。また、４年ぶりの米子公演を実施することにより、久しぶりに演奏者、観客ともに第九が持つ独特の高揚感を味わうことができた。 当日は目標を大きく上回る９５４名の観客が来場し、アンケートで９９．５％の方が満足と答えられるなど、県民が「アート」に親しむ環境づくりに向けて一定の成果をあげることができた。
			【課題】 本番ではマスクをつけての演奏となり、特に合唱では声がこもったり、演奏者の表情が見えないことにより、微妙なニュアンスが伝わらなかったのではないかと感じる。	【課題】 参加者数を制限したことで、本来第九の主役であるべき合唱団の存在感が薄れてしまったのは否めない。オーケストラピットを使用して舞台をせり出すなどして合唱団の人数を増やすべきであった。また、マスクの着用については、現在では健康観察を行なっているのであれば外して歌う方が望ましい。マスクを外すことで声の響きが失われることなく、発音などももっとクリアに聴衆に届けることができたのではないだろうか。
		合唱団募集については、マスコミも活用して出演者を公募し、広く県民が文化活動に携わる機会を提供する。 西部地区の状況として、中学・高校に合唱部が少なく、合唱に携わる方の人数も限られている。 これからの第九存続を考えると、初めて第九を歌う方の参加を募る必要があるため、今回はこれまでに第九を歌った経験のある方からの口コミによる勧誘を行う。	**達成度：概ね達成**	**達成度：概ね達成**
			【成果】 合唱団編成に関して本番のステージの広さを考慮し、感染予防の観点から、間隔を設けて安全に合唱をするために、合唱団を６０名程度として募集を行った。 地元のケーブルテレビで募集を呼び掛けたり、新聞の記事の中に募集を呼び掛けの掲載をお願いしたりした。 また、前回参加者や前回のアンケートで次回参加したいと答えられた方にも呼びかけをして公募を行った。 また、参加者の年代は２０	【成果】 出演者の募集について、地元ケーブルテレビや新聞を活用するとともに、前回参加者や前回アンケートで次回参加したいと答えられた方にも呼びかけを行うなど、幅広く公募を行なった。その結果、２０代から８０代までの幅広い年代の方々の参加を得るなど、広く県民が文化活動に携わる機会を提供することができた。 合唱団の編成に関して、コロナ感染予防のため色々と御苦労された事が伺え

			代から８０代と広く、幅広い年代の方々との交流や演奏ができた。	た。合唱団のメンバーの顔ぶれを拝見するとやはり長年続けて参加されている方が多く見られた。
			【課題】 全体の人数を制限したこともあり、パートによっては遅れて参加を申し込まれた方にお断りをしたケースもあり残念であった。 今回初めての参加者は７名で少なく、今後は地域にある合唱団との連携も含めて合唱団の公募を考えていきたい。	【課題】 東部・中部の開催では、複数の合唱団、あるいは個人レベルで参加しやすい参加方法となっているが、今回の米子第九公演では、初めての参加者が７名となっており、合唱団単位・個人単位での参加が難しいようである。第九を歌いたい・演奏したい希望者を多く受け入れるために、新規加入の団体・個人を柔軟に受け入れる努力が必要である。また、合唱とオーケストラの経験が豊富な方に協力いただくことも大事である。そのことによって、第九の文化を幅広い世代に、演奏と鑑賞の両面で伝えられると考える。 今後は、地域にある合唱団・指導者への働きかけを強化するなど、第九公演が持続可能なものとなるように出演者を確保していただくことを期待する。
「アート」が育む・「アート」を育む ～人づくり～	子どもたちがアートを鑑賞・体験、実践する機会の充実	高校生以下の入場料金を一般前売りの半額とし、当日券も前売りと同額とし、気軽に来場できるようにする。	**達成度：一部達成**	**達成度：一部達成**
			【成果】 高校生以下券を１，０００円にして販売を行い当日券も１，０００円で販売することができた。	【成果】 高校生以下の入場料金を一般前売りの半額の１０００円とし、当日券も前売りと同額とし、子どもたちも気軽に来場できるようにした。
			【課題】 当日の高校生以下の入場者は３７名で、１００名の入場者を期待していたが大きく下回った。原因の一つとして、公演当日は、中学生・高校生とも学期末テストの期間と重なり、来場しにくい時期であったように思われる。 高校生以下の参加や来場を考慮した日程を組むことを考えていきたい。	【課題】 当日は親子連れの姿なども見かけられたが、高校生以下の入場者は３７名と事業実施者が期待していた人数を大きく下回った。 小中高生以下の若者にとって 1,000 円は高いと感じる値段であるかもしれない。クラシック音楽に興味関心が少ない若者に関心を持ってもらうには、思い切って枚数を限定して 500 円での販売、あるいは小中高生への数量限定の無料招待券も考えたい。 少しでも若い年代に興味関心をもってもらわなければ、若い世代が第九を聴く機会が失われることになる。演奏会当日も若い観客が少なかったので、この第九の文化を次の世代に受け継ぐために、より積極的な方策が求められる。

		公演前日のリハーサルを高校生･大学生に公開し、鑑賞の場を提供する。 高校生への参加呼びかけを行い、次世代を担う第九合唱団・オーケーストラへの参加者を育成していきたい。 また、地元出身のプロとして活動をしているソリストを招聘し、目標や憧れ、地元の誇りとしてもらう事により、音楽を身近な物として感じてもらう。	**達成度：一部達成** 【成果】 ソリストは鳥取県に縁のあるソリストを４名招聘することができた。 中でもテノールの山本耕平氏は米子市出身であり、日本はもとより、世界で活躍する歌手であり、特に鳥取県西部地区では人気がある。 県民による第九では初めてソリストとして第九合唱団・オーケストラと共演し、好評を博すことができた。 【課題】 プログラムを考える段階で、高校生やジュニアにも親しみがあり、高校弦楽部に所属する生徒等が参加しやすいようにと考えたが、本番が定期テスト期間と重なり共演がかなわなかった。 リハーサル公開についても、高校生のみに公開できるようにしたが、定期テスト期間で出にくかったり、リハーサル時間が１８時３０分からと遅かったりしたため、参加者は１名にとどまった。	**達成度：一部達成** 【成果】 鳥取県にゆかりのあるソリストを招き、ソリストたちのレベルの高い演奏で、地元の合唱・オーケストラに関わる音楽家が同じステージで共演する喜びを味わうことができた。また、地元出身のソリストと共演することで、参加者の目標や憧れ、地元の誇りとしてもらう事により、音楽を身近なものとして感じてもらうことに繋げることができた。 【課題】 公演前日のリハーサルを高校生に公開し、鑑賞の場を提供したが､参加者は１名にとどまった。小中高生に参加を促すのであれば、定期試験などに影響しない開催時期を検討しなければならない。また、仕事をしているアマチュア演奏家と小中高生は生活スタイルが異なるので、双方が参加できる練習スケジュールを計画することは非常に難しいので、大人と小中高生で分散してスケジュールを組むことも考えたい。 前日リハーサルでは、どうしても遅い時間からの開始となるので、例えば当日のゲネプロを公開することも考えなければならない。すでに他県のオーケストラ公演ではゲネプロの公開が多くなりつつある。 バイオリンを習っているジュニア、あるいは米子のジュニアオーケストラにも公開する等、対象を広げても良いのではないだろうか。
「アート」で元気に～地域づくり～	地域における文化芸術の活性化	プロとの連携・協働により事業の質の向上に努め、プロの指導を受けたり、プロ奏者と共に演奏したりすることにより、県内奏者の技術向上および音楽解釈の多様性を学ぶ機会を提供する。 特に合唱部会では指揮者の解釈を理解するために、指揮者との練習をできるだけ多く組み、地元指導者と指揮者との連携を深め、43回の合唱練習を質の高い物に心がける。	**達成度：概ね達成** 【成果】 練習に関してはほぼ計画通りに行え、５月・６月は地元指導者により、音取や発音練習など基礎的な練習を行い、７月から本番指揮者の指導を受けたが、指揮者が要求する音楽表現や曲に対する解釈を理解しながら「怒鳴らない、美しい第九」を目指し練習を進めて本番に臨んだ。 また、指揮者との練習後には、地元指導者が打ち合せをし、次回の練習に備え準備を	**達成度：概ね達成** 【成果】 コロナ禍の練習ということで、様々な工夫や努力をされ、有意義な練習時間を持たれ、本番では堂々とした演奏を披露することが出来ていた。 合唱部会では本番指揮者と地元指導者が打ち合せを重ね、事前練習することで、本番指揮者との練習が有意義に進められ、より質の高い表現につながるよう工夫を行った。

			して、指揮者との練習が有意義に進めるよう練習を重ねていった。	
			【課題】 指揮者の全ての要求にこたえられているわけではなく、次回の公演に向けて、少しでも技術の向上を考えていかなければならない。	【課題】 コロナ禍の影響もあり、感染症対策や様々な制限が伴う中で難しい面もあったと思うが、目指していた「怒鳴らない、美しい第九」は、結果としてオーケストラに対して響き・ボリュームという点でバランスを欠いていた。 また、オーケストラピットを使用するなどして、合唱の人数を増やすことも考えたい。 プロの指揮者に対してアマチュアの合唱団、オーケストラが常に真摯に向き合っていくという姿勢で、この機会を好機として技術の向上を目指していってほしい。
		ソリストは、二期会所属の鳥取県に縁のあるソリストを選定し、地域に根ざした第九公演をめざす事により、参加者と来場者で一体となった達成感を提供する。 コンサートミストレスにTCOのメンバー、また地域にゆかりのあるソリストや奏者との共演により、「県民による第九」として、「コロナ禍でもできる」「私たちにもできる」という自信や活力を提供する。	**達成度：達成**	**達成度：概ね達成**
			【成果】 第８波と称される、新型コロナウイルス感染拡大により、公演ができるかどうかを不安視していた面はあるが、何より公演を行うことができた事に感謝をしたい。 公演に向けての団員の意気込みや、感染防止に対する意識の高さ等で、少ない人数でも力を合わせれば出来るという喜びと自信も感じている。 ソリストの選定については、観客も合唱団・オーケストラの団員、そして指揮者も含め満足して演奏を終えることができた。二期会の協力にも感謝したい。 また、地元に縁のあるソリストや、コンサートミストレス、TCO（とっとりチェンバーオーケストラ）のメンバーに演奏に加わってもらえたことで、当日は９５４名の観客が来場し、アンケートの中では、９９．５％の方が満足と答えられ、良かった点の中には数多くの点に満足をいただき、中でも観客のマナーという点にも満足をいただいていたことからも、今回の公演で目指す会場との一体感も得られたような気がする。	【成果】 コロナ禍の公演ということで、主催者側としては、様々な気苦労があったと察せられるが、無事本番を迎えることが出来、４年ぶりとなる第九を成功に導かれたことに、敬意を表したい。 新型コロナウイルス対策を行いながら練習を重ね、東京在住のソリスト、鳥取県在住のコンサートミストレスと共演を行うことで、第九の文化的意義を県民に伝えることができた。 終演時のアンケートで９９．５％の方が満足との回答を寄せていることに示されているように、参加者と来場者で一体となった達成感を提供し、「アート」で県民を元気にする一翼を担うことができた。

			【課題】 最初の曲が短かったこともあり、休憩を取らず第九の演奏に入ったが、演奏の合間にトイレに立つお客さんがおられた事に不満を持たれた方がおられたり、会場にたくさんの観客が入り、思った以上に会場が暑く感じられたりした方がいたようで、集中して演奏が聴けなかったとの声をアンケートからいただいた。 会場との一体感を感じていただくためにも、ホール環境を適切に整えていく事も運営上の課題となった。	【課題】 最初の曲と第九の間で、休憩と勘違いして席を立つ観客がおられたので、10 分程度の休憩が必要であったと思われる。 今回、自由席にしたことで、当日は会場前に非常に長い行列ができており、入場するのに時間がかかったこと、来場者同士の距離が近く密ができていた点は改善が求められる。感染症対策を考えれば、指定席販売にすることで、来場者は余裕を持って会場に来ることができ、並ぶことも、密になることも避けられたはずである。また、開演間際に入場してきた方々が座る席がなく、一部の観客が通路階段で座って鑑賞していたのは問題であった。ホール内で案内する係の誘導、会場前のアナウンス、会場内の空調、演奏中のドアの開閉のタイミング等々、もう少し細やかな配慮が必要と感じた。 客席の中での特等席の“ご招待席”の数をもう少し減らし、一般席にすることも検討する必要を感じた。
達成度集計(※5)			（１２／１８）≒６７％	（１０／１８）≒５６％

【定量目標・実績】

	目標	実績	（参考）昨年度実績
アンケート回収率（%）	３０％	４６．２％	３６％
観客満足度（%）（※6）	８５％	９９．５％	９３％
入場者数（名）（※7）	８００人	９５４人	８２７人

【自己評価総括】

○成果

・合唱は新型コロナウイルス感染症に対するリスクを負いながら、予防策をしっかりと行い公演まで行うことができた。４年ぶりとなる米子公演で、団員は演奏の喜びを感じながら本番を終えることができたように感じる。

・また、ソリストに招聘した４人とも鳥取県に縁のある方々で、東京二期会に所属し国内はもちろん海外でも活躍されている素晴らしいソリストを迎えての公演ができた事に満足をしている。

・また、観客動員を８００名と見込んで公演に取り組んだが、それをはるかに上回る９５４名の観客においでいただき、感謝をするとともに、皆さんが待ち望んでおられた第九の演奏を提供できたことに喜びを感じている。

・演奏面においても、指揮者からは米子公演の中で一番良い演奏ができたとの評をいただいた。

・観客アンケートでも９９．５%の方に満足をしていただき、練習の成果が表れたと思われる。

・たくさんの方々に支えられて公演が無事できましたこと、本当に感謝いたします。ありがとうございました。

○課題

・今回の合唱団参加者の年代は２０才代から８０才代まで幅広く参加はあったが、合唱団の数を舞台の大きさを考え、感染防止の観点から例年より絞った関係もあり、初めての参加者が７名と少なかった。今後の米子第九を考えていくにあたり、団員確保をどうおこなって行くか、参加者にも観客にも魅力ある公演にするためにはどのようにしていかなければならないかを考えていきたい。曲の大きさから考え、もっと多くの合唱団を編成していきたいと考える。

・今回の公演では、演奏者が本番ぎりぎりまでスタッフとして色々運営もしてきたが、第九の魅力は演奏するだけではなく、それを支える方々との繋がりも魅力の一つにあげられるのではないかと考える。団員の公募・練習ピアニストの公募に限らず、今回お手伝いをいただいたアルバイトの皆さんの動きを見ても、公演を支えるスタッフの公

募も考えていく必要があると思われる。
・参加者がだんだんと高齢化し、今後参加者をどう募っていくかを考えていかなければならないと感じている。小さな合唱サークルや西部地区にある合唱団体や連盟等とも連携をし、西部地区全体で盛り上げる第九、地域を元気にしていく第九を目指していく事も必要であると感じた。

【委員評価総括】

○成果
・ウィズコロナの中での公演として、主催者側が細やかな配慮を続けられ、４年ぶりとなる米子公演を成功に導かれた。
・第九ファンの来場者達も、開場前の長蛇の列からも察せられるように久々の第九に、各々に期待感が高まっていたのを感じられた。
・間隔を設けて安全に合唱をするために合唱団を６０名程度と例年より少ない人数で取り組み、練習の段階から新型コロナ感染症対策を行い公演実施につなげた。目標を大きく上回る９５４名の観客が来場し、アンケートで９９．５％の方が満足と答えられるなど、定量目標全ての項目で目標を達成し、大きな成果をあげることができた。また、入場の際の列の誘導や入り口での検温・消毒、会場内での注意書きなどの対策も適切に講じられており、安心して鑑賞する機会を提供することができた。
・今回のソリストに地元に縁のあるメンバーを選定することの効果は大いにあったと思う。オーケストラのメンバーに若手の奏者が目立ったのも希望が見い出せた。
・二期会所属の鳥取県に縁のある 4 人のソリストや、コンサートミストレスに「とっとりチェンバーオーケストラ」のメンバーに演奏に加わってもらうなど、地域に根ざした第九公演をめざす事により「私たちにもできる」という自信や活力の提供につなげた。
・鳥取にゆかりのある東京在住のソリストを招聘したことで、地元の演奏参加者に良い影響を与えていただけではなく、多くの聴衆に興味関心を持たせたことで観客動員にも好影響を与えていた。
・鳥取県で、米子市公会堂のような大きなホールがほぼ満席になっていたことは稀であり、県内の多くの方にレベルの高い第九を聴く機会を与えたと言える。

○課題
・来場者の大半は 50 歳以上であり、若い人の来場が少なかった。親子連れの姿なども見かけられたが、高校生以下の入場者は３７名と事業実施者が期待していた人数を大きく下回った。
・公演前日のリハーサルを高校生に公開し、鑑賞の場を提供したが、参加者は 1 名にとどまった。日程を含め、若い人たちや子どもたちが第九を通じてアートを鑑賞、体験、実践する機会の充実に向けた一層の工夫を期待する。
・高齢化する日本において、地元のオーケストラ、合唱団のメンバーも少しずつ高齢化するのは仕方のないことであるが、この素晴らしい第九文化を後世に残すために、やはり今から若い世代への積極的な参加を促さなければ、将来的に第九文化の存続そのものが難しくなるだろう。
・今回初めての参加者は７名とまだまだ少なく、引き続きこれまでに第九を歌った経験のある方からの口コミによる勧誘を行うとともに、今後は地域にある合唱団へ働きかけを強化するなど、第九公演が持続可能なものとなるよう出演者やスタッフを確保していただくことを期待する。
・若い世代はもちろんのこと、幅広い世代でより多くの合唱団、オーケストラ、あるいは個人演奏家が参加しやすい仕組みを作る必要があるように思えた。この点については、東部・中部・西部で第九公演の作り方が異なるので、それぞれの優れたところを合わせるような実施方法を創出することで、より良い鳥取県民の第九公演が実施できるのではないだろうか。
・演奏者がスタッフを兼ねるのはよくあることではあるが、やはり体力・気力を演奏面に集中できないところがある。多くの合唱団・オーケストラの団体・個人が関わることで、演奏する人、当日スタッフを分けることで、このような問題も解決されるだろう。今後は、運営・当日スタッフも募集することが望ましい。
・例年の米子公演では、ある程度整理されたオーケストラの人数と合唱でバランスの良い演奏を聴かせていたが、今回はオーケストラの人数がいつもより多く、逆に合唱の人数がいつもより少なかった。コロナ禍の影響もあり、感染症対策や様々な制限が伴う中で難しい面もあったと思うが、目指していた「怒鳴らない、美しい第九」は、結果としてオーケストラに対して響き・ボリュームという点でバランスを欠いていた。
・合唱団の“歓喜の歌”の迫力が、マスクのせいで、やはり以前の様には感じられなかった。今後マスクの改善や、マスクなしで歌うという方法も考えていくべきではと強く思った。

○その他事業に関する意見、感想など
・チケットについて、自由席であったために開場前から公会堂の前に長蛇の列ができており、観客同士の間に密が生まれていたことは、今後改善しなければならない。また、開演間際に入場した観客の中には、座席に座りきれなかった方もいたので、会場内の誘導、会場内アナウンスに問題があったと言える。この問題点については、指定席にすることで、長蛇の列、それによって発生した観客同士の密、開演間際に来場した方が座れなくなるなどの問題も解決できていたと考える。

４　専門家評価

第 20 回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート 2022 メイン事業
とりアートオペラ公演「ドン・ジョヴァンニ」
令和４年８月 28 日（日）　とりぎん文化会館梨花ホール

鳥取短期大学幼児教育保育学科助教　山川　智馨

１．基本方針に基づく評価
（１）企画意図
本公演においてオペラ「ドン・ジョヴァンニ」を取り上げた理由について、本作品はモーツァルトの三大オペラと言われ、世界中で公演され続けている不朽の名作オペラであることや、勧善懲悪の中で崩壊していくテーマが現代にも通じるものであることが挙げられていた。また、演技力と歌唱力が求められる難しい主役であるドン・ジョヴァンニ役に、世界で活躍する鳥取県が生んだオペラ歌手である谷口伸氏を起用したいということも挙げられていた。本格的なオペラを地元ゆかりのキャストで上演するという意図は十分に感じられ、作品の面白さや主役ドン・ジョヴァンニの魅力を伝えるという点で達成されていたのではないだろうか。

なお、鳥取オペラ協会では、2003 年に RAKUGOPERA「ドン・ジョヴァンニ」として公演し、今回は 18 年ぶりの全曲原語上演として本格的な取り組みを目指したということだった。せっかくそのような意図も含まれていたのであれば、前回の様子もプログラムに紹介されていると、前回と今回の違いをより楽しむことができたように思う。

（２）実施手法
出演者とスタッフは県内の人材発掘及び育成を目的として一部を公募し、騎士団長役がオーディションで選ばれたほか、演出助手１名と照明１名の応募があったとのことだった。こういった取り組みは地域の文化芸術の振興において重要な点であり、今後も継続的な実施とそれによる人材の定着を期待したい。また、今回はドイツで活躍されている谷口伸氏の出演を前面に押し出しており、公演本番においても期待を裏切らないパフォーマンスを披露されたことで、後述する観客の満足度につながったと考えられる。

なお、新型コロナウイルス感染予防にあたっては、練習時から「県規程マニュアルの徹底、順守」「検温、手指消毒」「連絡先の把握」「出演者、スタッフの抗原検査」「感染対策に関するアナウンス」「休憩時にドアを開放し換気」等の対策を徹底された。その結果、クラスターを発生させることなく、安心・安全に公演を終えることができた点は大いに評価できる。

（３）来場者の属性
出演者や製作等の関係者から本公演を知り、足を運んだという来場者が最も多いことが、アンケートから推測できる。それ以外では、谷口氏の歌を聴くために来場したというケースも多数みられた。

来場者の年齢層については、70 代以上が最も多く、20 代未満～30 代の来場者が少なかった。これは実際に客席を見渡しても、同様の印象を受けた。10 代の子どもたちは不要不急の外出を控えるように学校で指導がなされていたことも考えられるが、今後、この 20 代未満～30 代の年齢層をメインのターゲットにした作品も定期的に取り上げ、観客の裾野を広げていくことも求められる。

また、今回はとりぎん文化会館梨花ホールが会場であったことから、県東部からの来場者が圧倒的に多かった。一方で県中部および西部からの来場者は少なく、それが入場者数の目標値に届かなかったことの一因であると考えられる。新型コロナウイルス第７波の最中での公演であったため、その影響も大いに考えられるものの、もったいないようにも感じられる。

（４）観客の反応及びアンケート結果
アンケートの結果は「とても満足」「満足」の回答が多く、観客満足度は目標値の 90%を上回る 93.2%の結果となったことから、本公演は好評だったと評価することができる。満足した内容についての記述をみると、主演の谷口氏をはじめとする出演者への称賛が最も多く、それ以外にも鳥取で本格的なオペラを鑑賞できたこと、照明や舞台背景などの演出の良さ等が挙げられていた。特に、「初めてのオペラでしたがとても感動しました」「プロのオペラ（舞台）を初めて見て感動した」等、初めてオペラを鑑賞した来場者のコメントも数件みられ、いずれも満足度の高さが窺える内容であったことは、オペラの新規ファンの獲得を考えるうえで重要であると評価できる。

改善に関する記述では、字幕の位置が高かったという内容が最も多く、コメントの大半を占めていた。それ以

外については、オーケストラのチューニングでアナウンスが聞こえにくかったこと、オーケストラと歌の音量バランスが悪くて歌が消される場面があったこと、エアコンが寒かったこと、プレトーク終了から開演までの時間が長かったこと、照明が暗かったこと、字幕の誤植が多かったこと、観客のマナーが徹底されていなかったこと等が挙げられていた。

スマートフォンに関する観客のマナーやオーケストラのチューニング等の意見については、過去の公演における来場者アンケートでも記述のあった内容である。出演者側の立場からすると完璧な対策は難しい面もあるが、複数スタッフによる呼びかけの徹底や注意事項の文字化および配布など、何らかの改善が求められる。

２．公演に対する総評

全体をとおして完成度の高さを感じられた公演だった。数年前に一観客として鑑賞した「ヘンゼルとグレーテル」との比較になるが、出演者の歌唱レベルはもちろん、舞台背景や映像の美しさが当時よりも格段に洗練されたように感じられた。特に、「カタログの歌」のシーンにおいて女性の名前がカタログに次々刻み込まれていく映像は非常に面白かった。また、主演を務めた谷口氏のパフォーマンスは圧巻の一言で、最初に歌い始めた瞬間からすぐに惹きこまれた。谷口氏の存在によってステージ全体に一体感が生み出され、出演者たちを引っ張っていったことはおそらく間違いないだろう。コロナ禍による外出自粛を長い間求められ続けてきた中、本格的なオペラに生で触れることができたという感動と相まって、今回の満足度の高さにつながっていったのではないだろうか。

プレトークでは、開演 30 分前の 10 分間を使ってあらすじや登場人物、谷口氏の紹介等をされていた。オペラセリアを大河ドラマ、オペラブッファを朝の連続テレビ小説に例えるなどして親しみやすく、かつ分かりやすく説明されており、面白く聞かせていただいた。しかし客席の出入りや会話等でざわついた中での実施となっており、きちんと聞きたい人にとっては聞き取りにくく、もったいない印象を受けた。プレトーク終了から開演までの 20 分間が長いと感じた来場者もいたことから、プレトーク全体の効果的なあり方を今後検討していただきたい。

字幕については、1 階席後方で鑑賞した感想になるが、アンケートに多数記載があったとおり位置が高くて読みにくい印象を受けた。面白いシーンや有名なアリアが歌われるシーンでは字幕よりも出演者をずっと見ていたいと思うものだが、字幕を見ようとすると出演者から完全に視線が外れるうえに首が疲れてしまい、逆に出演者を見ていると歌詞を見逃して分からなくなるという具合だった。ただし、定番のステージ左右に字幕があるほうが良いかと言われると必ずしもそうではなく、どちらにしても歌い手の動きをすべて見逃さずに鑑賞することは不可能なことである。可能であれば、字幕メガネを用いる等のさまざまな手法を今後試してみると良いかもしれないと感じた。また、原語と日本語のどちらで上演するかについてアンケートで意見が分かれていたが、これは正解のないものである。どちらで上演するにしろ、なぜそうしたかという企画側の意図やそれぞれの魅力について十分に伝えることが重要であると考えられる。

なお、小道具を子どもたちに作ってもらうワークショップを前年度に実施し、本番で使用したと事業評価シートに記載されていたが、当日そのことについて何も触れられていなかったように思う。子どもが芸術を体験することができる有意義な試みであることから、プログラムやプレトークでぜひ紹介してほしかった。舞台背景は前述のとおり素晴らしく、強く印象に残っているが、小道具はワークショップの開催自体を存じ上げなかったこともあり、上演中あまり注目することがなかったことが悔やまれる。また、単に小道具を作ってもらうだけでなく、ワークショップに参加した子どもたちを当日招待する等の工夫もあるとさらに良かったのではないだろうか(私が聞き漏らしているだけだったり、すでに実施されたりしていたことでしたら申し訳ありません)。

３．課題と今後の展開に向けて

本公演に限った話ではないが、鳥取県全体でこの事業を盛り上げているという印象を感じにくい。とりアート自体の認知度や新型コロナウイルスの影響等は無視できないが、プログラムに掲載されている過去の鳥取オペラ協会公演記録によると、県西部でのとりアートオペラ公演はこれまで一度も実施されていない。また、今回のワークショップや公開レッスン等の関連事業においても県西部では実施されていない。今回は各地区で周知コンサートを予定していたものの新型コロナウイルスの影響ですべてキャンセルとなったとのことだったが、それを抜きにしても事業の開催地区にバラつきがあるように感じられる。その理由はさまざまにあるのだと思うが、とりアートの「メイン」事業と銘打つからには、本格的なオペラの上演そのものだけでなく、ここでしかできない広報およびそれによるオペラや芸術の普及をぜひ実現していただきたい。そのためには、他県における文化芸術の普及に関する手法のリサーチ、アートマネジメント専門家の招聘、県内のさまざまな芸術団体や企業と連携強化等といった、何らかのアプローチが手立てとして考えられる。

（参考）

鳥取県文化芸術事業評価委員会委員名簿（令和４年度事業評価）

氏　名	所属等	備考
石谷　依利子	砂丘 YOGA 代表	
荻原　恵子	フォークダンス、レクリエーションダンス、 日本民踊指導者	
嘉賀　收司	境港市民図書館館長	
門脇　明子	音楽家	副会長
川口　朋子	DANCE for REAL 代表	
小林　圭子	ミュージック・オフィス♪DoReMi 代表	
谷口　透	鳥取大学地域価値創造研究教育機構副機構長	
野川　貴代子	米子市文化協議会	
村田　速実	打吹童子ばやし代表、社会福祉法人みのり福祉会理事長	
山川　智馨	鳥取短期大学幼児教育保育学科助教	
山本　仁志	前鳥取県教育長	会長
渡邉　寛智	島根県立大学短期大学部准教授	

※令和５年３月末時点

事業別評価報告書執筆担当一覧

番号	事業名	主体	団体名	実施日	実地検証委員数	執筆担当
1	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022メイン事業	鳥取県総合芸術文化祭実行委員会	とりアートオペラ公演実行委員会	令和4年 8月28日(日)	4	門脇委員 谷口委員
2	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022東部地区事業		東部地区企画運営委員会	令和4年 11月26日(土) ～27日(日)	5	谷口委員 石谷委員
3	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022中部地区事業		中部地区企画運営委員会	令和4年 11月19日(土) ～20日(日)	5	山本委員 川口委員
4	第20回鳥取県総合芸術文化祭・とりアート2022西部地区事業		西部地区企画運営委員会	令和4年 11月12日(土) ～13日(日)	4	野川委員 嘉賀委員
5	第13回とっとり伝統芸能まつり	鳥取県	地域づくり推進部文化政策課	令和4年 12月4日(日)	3	渡邉委員 村田委員
6	第66回鳥取県美術展覧会			令和4年 9月17日(土) ～12月7日(水)	１３	荻原委員 小林委員
7	第4回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会			令和4年 11月13日(日)	3	小林委員 山本委員
8	県民による第九　米子公演	鳥取県文化団体連合会	県民による第九公演実行委員会	令和4年 11月27日(日)	4	渡邉委員 門脇委員

評価委員会の開催状況

回　数	開催日	報告・協議内容
第 1 回	令和 4 年 8 月 23 日	１．報告事項 評価委員の就任について ２．協議事項 ア　会長・副会長の選任について イ　令和 4 年度評価方針について ウ　令和 4 年度評価対象事業について エ　令和 4 年度評価事業の実地検証・執筆担当について
第 2 回	令和 5 年 3 月 10 日	１．審議事項 令和 4 年度事業別評価報告書案について ２．報告事項 令和 4 年度専門家評価結果について
第 3 回	令和 5 年 3 月 10 日	事業実施者への評価報告及び意見交換 ・第 35 回県民による第九米子公演
第 4 回	令和 5 年 3 月 17 日	事業実施者への評価報告及び意見交換 ・第 13 回とっとり伝統芸能まつり ・第 66 回鳥取県美術展覧会 ・第 4 回万葉の郷とっとりけん全国高校生短歌大会
第 5 回	令和 5 年 3 月 20 日	事業実施者への評価報告及び意見交換 ・とりアート 2022 メイン事業 ・とりアート 2022 東部地区事業 ・とりアート 2022 中部地区事業 ・とりアート 2022 西部地区事業

鳥取県文化芸術事業評価委員会設置要綱

（目的）
第１条　県が実施又は助成する文化芸術事業のうち、次条に掲げる事業を年度ごとに点検することにより、当該事業における良質な作品創造や県民の文化芸術事業への鑑賞、参加の機会の充実及び効率的な事業の運営方法を確立することを目的に鳥取県文化芸術事業評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（評価対象事業）
第２条　評価対象事業は、委員会と県が協議のうえ、次に掲げる事業のうちから選定する。
（１）鳥取県総合芸術文化祭主催事業
（２）鳥取県文化団体連合会加盟団体助成事業

（委員会の任務）
第３条　委員会は、鳥取県附属機関条例（平成 25 年鳥取県附属機関条例第 53 号）別表第 1 で定める事項を調査審議するものとし、委員会の任務の具体的内容は次の各号に掲げる事項とする。
（１）評価に係る実施方針の決定
（２）評価項目の作成及び調整
（３）評価報告書の作成、公表及び評価報告会の開催
（４）評価対象事業における改善が必要な事項の指摘
（５）被評価者が作成する改善計画の承認

（委員の任務）
第４条　鳥取県文化芸術事業評価委員会の委員（以下「委員」という。）は、作品の鑑賞・実地検証及びアンケート調査資料等に基づく評価を行う。なお、評価対象事業の企画・立案に関わる者は、当該事業の評価を行うことができない。
２　委員会は、複数年にわたり改善が認められない評価対象事業について、県に対し補助金支出の妥当性に係る説明を求めることができる。

（組織）
第５条　委員会は、県民（県内在勤者を含む。）で、調査審議する事項に関し知識又は経験を有する者のうちから、知事が任命する。
２　委員会は、委員１５名以内をもって組織する。

（会長）
第６条　委員会に会長を置く。
２　会長は委員の中から互選する。
３　会長は、会務を総理し、委員会を代表する。
４　会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名する委員が、その職務を代理する。

（任期）
第７条　委員の任期は２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任務期間とする。
２　委員は、再任されることがある。

（会議）
第８条　委員会の会議は、会長（会長が定まる前にあっては委員会の庶務を行う所属の長）が招集し、会長が議長となる。
２　委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができない。
３　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。
４　会議には、会長が必要と認めたときは、委員以外の者に出席を求めることができる。

（事務局）
第９条　会議の事務を処理するため、鳥取県地域づくり推進部文化政策課に事務局を置く。

（要綱の改正）
第 10 条　この要綱の改正は、会議の決議を受けなければならない。

（補則）
第 11 条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、会長が委員会に諮り、別に定める。

附　則
（施行期日）
１　この要綱は、平成２６年１月１５日から施行する。
２　平成２５年度中に任命する委員の任期については、第５条第２項の規定にかかわらず、平成２６年３月３１日までとする。

附　則
（施行期日）
１　この要綱は、平成２７年７月１５日から施行する。

附　則
（施行期日）
１　この要綱は、平成２８年２月５日から施行する。

附　則
（施行期日）
１　この要綱は、令和元年７月２４日から施行する。

令和４年度鳥取県文化芸術事業評価報告書

令和５年４月

〒６８０－８５７０
鳥取市東町一丁目２２０番地
鳥取県文化芸術事業評価委員会（事務局：鳥取県地域づくり推進部文化政策課内）
電　　話：０８５７－２６－７８３９
ファクシミリ：０８５７－２６－８１０８